

第 3 回足立区文化・読書・スポーツ推進委員会 会議録

| | |
|------------------|--|
| 会議名 | 第 3 回 足立区文化・読書・スポーツ推進委員会 |
| 事務局 | 地域のちから推進部 |
| 開催年月日 | 令和 7 年 9 月 26 日（金） |
| 開催時間 | 14 時 01 分～15 時 59 分 |
| 開催場所 | 足立区生涯学習センター 研修室 1 |
| 出席者 （敬称略、順不同） | <p>岩永雅也（放送大学 学長）／西岡龍彦（東京藝術大学 名誉教授）／溝口紀子（日本女子体育大学 教授）／小泉ひろし（区議会議員）／葛西啓之（株式会社いのちとぶんか社 代表取締役社長）／傍嶋賢（SOBAJIMA STUDIO 代表）／川村みこと（区議会議員）／長沖竜二（図書館総合展運営委員会 事務局長）／木村潤平（パラリンピックトライアスロン選手（一般財団法人 Challenge Active Foundation 代表理事））／田中ひろ子（公益財団法人足立区スポーツ協会 会長）／田島のぞみ（区民（公募））／中野理紗（区民（公募））／古瀬清美（区民（公募））／中村重男（区民（公募））</p> <p>大久保中央図書館長・3 分野連携担当課長／江連地域文化課長・生涯学習支援課長／河合図書館サービスデザイン担当課長／齋藤生涯学習支援課文化・読書・スポーツ連携推進担当／早川地域文化課調整係長／坪井スポーツ振興課振興係長／鶴殿中央図書館管理係長／勝倉地域文化課調整係主事／河野中央図書館管理係主任／川内スポーツ振興課振興係主事</p> |
| 欠席者 | <p>原田隆史（八洲学園大学 教授）／荻野美恵子（東京都盲人福祉協会 女性部会長）／高祖常子（子育てアドバイザー／キャリアコンサルタント）／田口幹人（合同会社未来読書研究所 代表）／伊藤のぶゆき（区議会議員）／栢山猛（株式会社サンベルクスホールディングス スポーツクラブ事業部 事業部長）</p> |
| 会議次第 | 別紙のとおり |
| 資料 | <p>資料 1 各部会における主な意見及び今後の方針について</p> <p>資料 2 令和 7 年度 評価報告書案</p> <p>資料 3-1 アンケート調査票案（16 歳以上用）</p> <p>資料 3-2 アンケート調査票案（小 5・中 1 用）</p> <p>資料 4 足立区文化・読書・スポーツ推進委員会 スケジュール</p> |
| その他 | <p>外部有識者 1 名</p> <p>（森村繁晴（放送大学 次世代教育研究開発センター 特命研究員））</p> |

(審議経過)

開 会

■事務局（中央図書館長／3 分野連携担当課長）

皆さん、こんにちは。定刻になりましたので、ただいまから第 3 回足立区文化・読書・スポーツ推進委員会を開催させていただきます。本日はお忙しい中、本委員会へご出席いただきまして誠にありがとうございます。

私は、本委員会の事務局を務めさせていただきます、地域のちから推進部 3 分野連携担当課長の久保でございます。本日もどうぞよろしくお願いいたします。

初めに、4 点ご連絡させていただきます。

まず、1 点目です。本委員会は、足立区文化・読書・スポーツ推進委員会条例第 6 条第 2 項に基づき、過半数の委員のご出席により成立いたします。本日は 14 名の委員が現在いらっしゃっておりますけれども、定数の 20 名に対して過半数の委員にご出席いただいておりますため、本委員会が成立していることをご報告させていただきます。

なお、本日は外部有識者の方にもご出席いただいております。放送大学次世代教育研究開発センター特命研究員の森村繁晴様です。森村様には、本日の議題の一つでもありますアンケート調査について、ぜひご助言を賜りたいと存じますので、どうぞよろしくお願いいたします。

次に、2 点目となります。本委員会は条例で公開を原則としておりますため、会議録につきましてはホームページ等で公開させていただきます。なお、会議録を正確に作成するため、皆様のご発言を録音させていただきます。また、記録のため写真撮影をさせていただく場合がございますので、あわせてご了承ください。

3 点目となります。次第に入りましたら、ご発言の際には最初に委員名をおっしゃっていただくからご発言をお願いいたします。

最後に、4 点目となります。本日の資料につきましてご案内いたします。本日の資料は、次第の表面に記載のとおりとなります。資料 1～資料 4 までございます。順次ご説明させていただきますので、大変恐れ入りますが随时お手元にご用意いただきまして、お目通しいただくようお願いいたします。また、閲覧用といたしまして、3 分野計画書の冊子をお手元にご用意しておりますので、必要に応じてご参照いただけますと幸いです。

なお、本日は、会議時間の半分程度を使ってグループ単位での意見交換を予定しております。そのため、このような座席配置とさせていただきます。詳細につきましては、後ほど改めてご説明させていただきます。

それでは、ここからは岩永会長に進行をお願いしたいと思います。岩永会長、どうぞよろしくお願いいたします。

■岩永会長

会長の岩永です。暑い中、ご参集いただきましてありがとうございます。

この 6 月から 8 月にかけて、短い期間しか設定しておりませんでしたけれども、この間、評価作業、あるいはアンケート調査票の検討作業などにご協力いただきました。誠にありがとうございました。改めて感謝申し上げます。

本日の全体会ですけれども、各分野の施策評価シートの確認・共有、それからアンケート調査票案の確認、分野横断の意見交換という 3 つのテーマが主な議題となっております。先ほど事務局からもありましたけれども、かなりの時間をグループディスカッションに取っておりますけれ

ども、今回はせっかくの全体会なので、例えば読書は読書、スポーツはスポーツ、文化は文化というふうにグループを組まないで、ありていに言えばごちゃ混ぜになっておりまして、そこで横断的な議論もできるのではないかとということで、こういうやり方をさせていただいております。

先ほど今日の 3 つのテーマと申し上げましたけれども、そのうちの 1 つであります評価作業は一旦本日で終了ということになりますけれども、引き続き新計画策定に向けてご協力をお願いしたいと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

1 各部会における主な意見及び今後の方針について

■岩永会長

それでは、早速次第に沿って事務局から説明をお願いしたいと思います。

まず、次第の項の第 1 番、各部会における主な意見及び今後の方針について説明をお願いします。

■事務局（中央図書館長／3 分野連携担当課長）

それでは、大久保から次第の 1 番についてご説明させていただきます。

お手元に資料 1 をご用意ください。A4 縦のホチキス留めの資料になります。「第 1 回・第 2 回部会における意見及び今後の方針」でございます。前回の全体会から本日の第 3 回全体会に至るまで、各分野で 2 回ずつ、計 6 回の部会を開催させていただきました。その中で様々な意見を頂戴しておりますので、その中から主な意見をご紹介します。そこに併せて事務局の今後の方針もご説明させていただきたいと思っております。

こちらの資料は 4 ページございますが、まず 1 ページ目をご覧ください。評価に関するご意見となります。1 ページ目は 1 番～3 番までございますが、内容としましてはいずれも同じものになります。文化、読書、スポーツ、それぞれの分野から指標の見直しを検討すべきではないかというご意見を頂戴しております。施策の達成度を測るに当たって、本当に適切な指標であるかですとか、様々なご意見を頂いておりますので、こちらにつきましては、今年度はもう既にこの評価でやらせていただいているのですけれども、今後の評価に当たって、計画の見直しに合わせて、より適切な成果指標の設定ということで、委員の皆様のご意見も踏まえながら設定していきたいと考えております。

ページをおめくりください。2 ページ目となります。こちらの 4 番～7 番も評価に関するご意見となっております。それぞれ主な部分をご説明させていただきます。4 番につきましては、こちらについても評価に当たって、これまでの経緯を踏まえた評価というのが物によっては難しいものがあるというご意見を頂いております。ですので、そのあたりが評価の際により分かるような形で、事務局のほうでも今後ご説明できるような形で進めていきたいと思っております。

5 番の読書のところでございますが、今回、計画の指標については基本的には数値で測るものとなっておりますが、必ずしも数値、定量的な評価だけではなくて定性的な評価、そういったものも踏まえて今後評価していったらいいというご意見を頂いております。

6 番と 7 番はスポーツの部会で頂いたご意見となっております。スポーツ部会におきましては、評価の仕組み等について様々なご意見を頂戴いたしました。6 番のご意見につきましては数字の評価だけでは難しい部分があるですとか、7 番のところでは評価調書そのものの見直しが必要ではないかというご意見を頂きました。今回、評価に当たっては、事業の評価調書と施策の評価調書をそれぞれご用意してご説明させていただいたのですが、その関連性が分かりづらいですとか、そ

もそも一つ一つの事業についての分析が深掘りできていないので、なかなか事業単位の評価も難しいというようなご意見を頂いておりますので、このあたりについても改善してまいりたいと思います。

おめくりいただきまして、3 ページ目以降はアンケート調査に関するものになります。後ほどアンケートの調査票については細かく見させていただきますので、主なところだけご紹介させていただきます。

まず、3 ページの 4 番のところになります。読書分野でのご意見ですが、今回、基本属性の質問の中に居住年数を入れてほしいというご意見がございましたので、こちらを入れさせていただいております。

最後の 4 ページ目になります。7 番と 8 番のところをご説明させていただきます。スポーツ部会におきまして所得が分かるような項目ですとか、そういった質問は入れられないのかというご意見を頂きましたが、今回の調査においては、所得に関するストレートなご質問については、なかなかデリケートな部分もありますので、入れるのは控えさせていただきたいということでご説明させていただいております。あと、8 番はご質問になりますが、今回アンケートは無作為抽出ということになっていますが、足立区の実地の地域ですとか年齢層の偏りというのは、地域ですとか年齢層は考慮されているのかというご質問がありましたので、そのあたりは実態に即して抽出していきたいということでご説明させていただいております。

長くなりまして申し訳ございません。こちらの資料についての説明は以上となります。

■岩永会長

ありがとうございました。

ただいま事務局から各部会の意見、そして今後の方針についてご説明いただきましたけれども、ここまでのところで議論をこれまでしていただいた委員の皆さんから、ご質問等がありましたらお願いします。

いかがでしょうか。そんなことは言っていないとか、そういう話がありましたら。大丈夫ですか。——ありがとうございました。

2 各部会における評価及び評価報告書案について

(1) 評価報告書案

(2) 質疑応答

■岩永会長

それでは、先へ進めたいと思います。

続きまして、次第の項の 2 番目、各部会における評価及び評価報告書案について、事務局から説明をお願いします。

■事務局（中央図書館長／3 分野連携担当課長）

それでは、また大久保からご説明させていただきます。

こちらの共有の進め方についてでございますが、事務局からのご提案といたしましては、今回評価をそれぞれの分野でまとめておりまして、各部会の部会長からご説明いただく形でお願いさせていただきたいと思います。今回、評価調書、実際に各部会で作成していただいた施策の評価シートですとか、それをまとめた資料などをお作りしております。

お手元の資料 2 をご覧ください。こちらは評価報告書の冊子案となります。おめくりいただい

て、最初のほうは評価の仕組みですとか、実際にこれまでどのような形で評価活動を進めてきたかという経過をまとめさせていただいております。

具体的な評価内容につきましては、6 ページから記載させていただいております。6 ページが文化分野の施策の評価の一覧、7 ページが読書、8 ページが運動・スポーツという形になっております。本日はこのあたりの評価結果の全体像ですとか、あとはめくっていただきまして、11 ページからが実際に皆様にご作成いただいた評価シートになりますけれども、そこでの議論を踏まえて、改めて各分野に関する課題ですとか、今後議論すべき事項などを各部会の部会長からご説明いただく形でお願いしたいと考えております。

私からのご説明は以上となります。

■岩永会長

ありがとうございました。

それでは、今のような進め方で皆さんよろしければ、何かご異議がありましたらお願いします。よろしいでしょうか。

全員からお話を伺うということも考えられるのですが、せっかくまとめていただいておりますので、各分野の評価結果について、文化、読書、スポーツの部会長に説明していただいて、それから質疑をしていきたいと思います。これは分野ごとに質疑をやりますか。

■事務局（中央図書館長／3 分野連携担当課長）

そうですね。

■岩永会長

では、分野ごとにやっていきましょう。それでは、恐れ入ります、西岡副会長、お願いします。

■西岡副会長

それでは、文化芸術部会の評価報告をいたします。

まず、コロナ以降、足立区の文化芸術は関係者のご努力で全体として非常に順調に進んでいると感じております。郷土博物館のような大型の施設がリニューアルして、とてもユニークな美術博物館というような機能を持つようになりました。郷土の文化財の収集も順調ですし、とても権威のある専門誌でこの文化財が紹介される機会もあつて、非常に良い展開になっていると思っております。あとは地域学習センターなども非常に多様な企画を立てておられて、それも非常に順調に進んでおりますし、パンフレットのデザインなども改良されて、非常にすばらしい冊子になっております。

このように全体として非常に順調であるので、その中で評価できる点と評価が少し低い点について具体的にご紹介したいと思っております。

まず、評価できる点なのですが、ここの中の1・2の「子どもの成長に応じた文化芸術事業」なのですが、足立区の子どもの対する文化芸術事業を評価している区民の割合というのが、令和4年から令和5年で2倍近くアップしております。区内の小学5年生が対象なのですが、小学5年生だけなのですが、それ対象の芸術鑑賞体験事業。これは劇団四季のミュージカルをお子さんに、こちらからバスを用意してきちんとした劇場で鑑賞できるという、なかなかご家庭によってはお子さんがそういう体験をする環境にないようなことが多いと思いますし、小学生の中でも5年生ぐらいになりますと、芸術鑑賞みたいなことに多感な時期ですので、非常に有意義な企画だと思います。これについては、ミュージカルについてお子さんの反応が非常によく、保護者の方からも子どもが自ら自分が体験したミュージカルについて親にいろいろなことを語って

くれると話されて、これは非常に評価できると考えております。

それから、3-1 になりますが、「文化財・文化遺産を調査し、保存・活用する」というところ。これは先ほどご紹介した郷土博物館がリニューアルいたしました。これは、文化財の一般公開やイベント化による利活用の成果が、地域文化への理解と誇りを持つという点で非常に意義深い取組であります。

それから、次に少し評価が低い点なのですが、3-2「地域の伝統芸能を継承・活性化させる」ということで、これは非常に難しい問題でありまして、多分、全国的にいろいろなところでいろいろな試みがなされていると思うのですが、なかなか今の時代にはこれは良い方法だというものが見つからない難しい問題だと思います。子どもさんの周りにある環境というか、文化自体が劇的に変わっているのです。私のような世代ですら、これまでの50年間、60年間の文化芸術の体験自体が変わっておりますけれども、ここ10年、20年というのは、子どもさんにとっては生まれたときからデジタルに接するようになって、それで成長している中で、伝統的なものを子どもたちにどう継承させていくのか、継承してもらっていくのかという難しい問題があると思います。

これについては、これから様々な考え方を足立区だけの問題ではなくて、いろいろな取組自体を調べて、足立区の伝統芸能の継承という新しいモデルみたいなものがつくれるようなところまで踏み込まないと、良い評価にならないのではないかと考えております。だから、点数としては少し辛い点数をつけてしまっておりますけれども、ここはむしろ足立区として、ほかの地域に対しても足立区の伝統文化の継承にこういう取組があるんだということを、これからアピールできるものになるのではないかと期待しております。

最後に、新計画策定に向けた論点整理についても議論がありましたので、少しだけご紹介したいと思っております。

まず、事業展開の地域的な偏りというものが議題になりました。足立区は特にということかもしれないけれども、北千住に非常に施設が偏ってしまって、どうしても千住中心になってしまっているということで、そこが成功している一方で、それが構造的な成功であると言えるわけです。それをどのように、これから地域的な偏りをうまく解消していくのかということが議題となっております。

それから、広報とか情報発信の強化ということなのですが、これも今アナログとデジタルが共存する難しい時代ではありますけれども、単なる告知手段ではなくて、文化芸術への入り口としていけるようなアプローチが可能ではないかという意見が出ておりました。

それから、これは先ほどご紹介が既にありましたけれども、指標の見直しの話も出ておりました。

簡単ではありますが文化芸術の報告です。ありがとうございました。

■岩永会長

どうもありがとうございました。何かご質問、ご意見がありましたらお願いします。

私から1つ。ミュージカルの鑑賞を小学校5年生にという、これは料金はどうなって。

■西岡副会長

全部足立区持ちです。

■岩永会長

そうですか。それは評価が高くなるのはある程度当然かなと。やはり、先ほど西岡副会長もお

っしかったようにばらつきがありますから、そういうものにアクセシビリティの高い家庭と必ずしもそうでない家庭とのばらつきがあるので、公的なもので支援するというのは当然だと思いますけれども、そういうことが当面は必要なのかもしれないですね。ありがとうございました。

ほかにいかがでしょうか。よろしいですか。

もし何かありましたら後でも結構ですので、特に文化分野の評価に参加された方からご意見がありましたらお願いします。

続いて読書分野に移りますが、本日は原田副会長がご欠席ということですので、恐縮ですがけれども代理として大久保中央図書館長に読書分野の評価の説明をお願いしたいと思います。よろしくお願いします。

■事務局（中央図書館長／3分野連携担当課長）

それでは、大変恐縮ですが、事前に原田部会長とご相談させていただきまして、それを踏まえて私のほうで読書分野での意見のまとめということでお話をさせていただきます。恐れ入りますが、私のお話の後にもし補足等がございましたら、読書部会の部会員の皆様から適宜ご発言いただければ幸いです。よろしくお願いいたします。

まず、読書分野の評価の総括の部分でございますけれども、資料2の7ページをご覧ください。こちらが読書計画の「評価対象施策とその評価」という形となっております。こちらは文章でも原田部会長に書いていただいておりますけれども、基本的には4以上の評価がついているということで、総じて高い評価になったというコメントを頂戴しております。一方で、この中で施策1-3だけが全て3評価がついております。こちらについては後ほどご説明させていただきます。

では、文化分野に倣いまして、評価の高かった施策と低かった施策、それぞれ幾つか抽出してご説明させていただきます。評価報告書の35ページ、36ページをお開きください。まず、評価が高かった施策の1つ目といたしまして、こちらは学校図書館との連携を図る施策となっております。足立区では近年、学校図書館についてアクションプランという具体的な計画をつくって、例えば小学校への派遣職員の配置日数拡充ですとか、学校図書館へのアドバイスをを行うスーパーバイザーの配置、あとは公立図書館との連携ということで、公立図書館の本を学校図書館に配送するサービスなど様々行っております。その結果、指標としてもかなり高い数字が出ておりまして、高い評価を頂いているところとなっております。

続きまして、37ページ、38ページをお開きください。こちらは施策の2-1「区立図書館資料の充実と活用」ということで、基本的な図書館の資料の拡充の施策となっておりますけれども、ご注目いただきたいのが38ページの5番のところで評価は全て4がついておりますが、こちらが部会の委員の皆様の評価となります。一方で、その上の評価が区の自己評価になりますけれども、全体評価が3、達成度が2、方向性が3ということで自己評価が低いのですが、外部委員の皆様には高い評価をつけていただいたというところになります。こちらの理由といたしましては、基本的には資料の貸出しというのが成果指標と設定されていますので、それはもう近年右肩下がりで落ちてきている状況です。ただ、原田部会長はじめ委員の皆様からコメントいただいたのは、そういったものは全国的な傾向であって、決して足立区だけが低い水準ではないと。その中で言うと足立区は平均的な水準であるため、過剰に低評価にする必要はないだろうということで、むしろ外部委員の皆様からはいろいろ実際に行っている事業ですとか、そういった内容を評価して4をつけていただいた形となっております。

最後に、低かった施策ですが、ページをお戻りいただきまして33ページ、34ページをご

覧ください。こちらが主に小さいお子様ですとか保護者の方への啓発事業となっておりますけれども、全て 3 の評価がついております。理由といたしましては、鍵になります保健センターでの読み語りですとか、妊娠期・出産期の保護者の方への啓発事業がコロナ禍で止まってしまって、その後、再開できていないと。そういった未実施の事業があるということで、達成度ですとか方向性が低くなっているという状況でございます。こちらについてはぜひ実施してほしいというご意見を頂いておりますので、事務局としては今後改善していきたいという点になります。

最後になります。新計画策定に向けての検討事項といたしましては、大きく 3 点挙げていただいております。1 点目が、やはり多様な読書活動の推進ということで、例えばこれまで力を入れてこなかった大人向けのイベントを実施するですとか、イベントを実施するにしても時期ですとか話題性といったものを重視して、前例踏襲にならないようなイベントを実施すべきというようなご意見を頂いております。

2 点目といたしましては効果的な情報発信ということで、従来の情報発信だけではなくて図書館外での情報発信ですとか、区民が受動的に情報を受け取れるような仕組みを構築してほしいというようなご意見を頂いております。

最後、3 点目が指標の見直しということで、先ほど貸出冊数が全国的に低くなっているというお話もございましたけれども、そうであるならば実際にどういった形で施策の達成度を測るべきかということで、指標の見直しをすべきというご意見も頂いておりますので、今後の検討課題とさせていただきますと思います。

私からのご報告は以上となります。

■岩永会長

ありがとうございました。7 ページの一番最初に「他の分野と比較しても、全体として、高い評価」と書いてあると、ちょっとけんかを売っているふうに見えないこともないので、「なんだ！」という感じにもなるかもしれません。それだけ達成に自信があった、評価できたということかもしれません。

いかがでしょう。読書の方、それ以外の方でも結構ですけども、何かご質問、ご意見がありましたらお願いします。——よろしいでしょうか。

それでは、こちらも何かありましたら、いつでもご意見を言ってください。大久保さん、どうもありがとうございました。

続いてスポーツ分野のほうですけども、こちらは溝口副会長に評価結果のご説明をお願いしたいと思います。よろしくお願いします。

■溝口副会長

改めまして、運動・スポーツ分野の部会長を拝命しました溝口でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

第 1 回、第 2 回の部会での議論を踏まえ、部会の評価報告についてご説明させていただきます。ページで言うと 8 ページになります。私も含め、部会のメンバーのほとんどが新規の方が多い部会となります。その点では方向性のところが低調な、少し厳しめの評価に、ほかの部会と比べると新しい方が入ってきたというところで、この辺が厳しめだったかなという印象があります。

まず、最初に評価できる点についてご説明します。子どもから高齢者、障がいがある方まで、幅広い世代が運動やスポーツを楽しむきっかけづくりが着実に進んでいるという評価です。とりわけ報告書の 8 ページにもあるように、成果指標では多くの事業が目標を達成して、半数以上が A

評価を獲得しております。新型コロナが 5 類に移行したことで、既存の事業の見直しが効果を上げて、とりわけ高齢者に向けた「パークで筋トレ」というものが非常に定着したというのは大きな成果であると評価しております。今後はこの実績を踏まえて、子どもの体力向上を目指した新たな事業を加え、世代を超えた取組をさらに広げていくということが期待されているという評価でした。

また、区内でプロスポーツやパラスポーツに触れる機会が増えたことも評価できます。とりわけ東京ヴェルディや読売ジャイアンツといったプロチーム、さらに大学等の協力により、観戦や体験の場だけではなくボランティア活動の機会も生まれました。多様な主体と連携することで、区民がより身近にスポーツと関われる環境が整いつつあるのではないかと、地域全体の活性化につながっているのではないかとという良い点の評価がありました。

一方で課題もございました。既存事業は参加者全体が増えている——コロナ以降、体を動かそうという意味では増えているのですが、その一方で新規の参加者の伸びというのは期待ほどでもなかったというところです。とりわけ社会人の層の取り込みが十分ではなくて、新しい層へどうやってアプローチしていくかというのが大きな課題だということが分かりました。事業の成果を測る際に、新規参加者数や実数などの多角的な指標で詳細を把握する必要があるのではないかと意見が出ました。PR 活動の工夫や付加価値を丁寧に説明していくことで、新規と継続双方の参加を促す仕掛けが今後求められていると思います。

次に、評価指標とアンケートに関する議論です。これまで成果指標を中心に行ってきたのですが、アンケートの回答が意欲的な層だけに偏っているのではないかと、それ以外の人あまり参加していないのではないかとというところで、数値と現場の実感に大きな乖離があるのではないかと意見がありました。例えば、アンケートでは意欲向上は 9 割を超えている結果が出ていたとしても、現場の体感はそこまで高くはないのではないかとというリアルな声が聞こえてきたりとか、指標そのものが曖昧で成果を正しく測りにくいということも、このスポーツ部会では課題として挙げられました。今後は運動していないという層の方の意見が拾えるようなアンケート手法を見直す必要があるのではないかと意見がありました。

そして、事業内容や施策展開においても改善点が 3 つあります。1 つ目は、理念的な色合いが強くて従来型の施策にとどまっているのではないかと。とりわけ、それが新規の参加数の伸び悩みにつながっているのではないかとということで、今後はスクラップ・アンド・ビルドの考え方を取り入れて、効果の高い施策に重点を置くということが必要ではないかとということです。

2 点目は、足立区の第 2 公式 LINE の「あだち脳活ラボ」と連携強化して、デジタルツールを生かした新規の参加者を取り込んでいくということが重要ではないかとということです。

3 つ目ですが、広報・情報発信の課題です。現状では非常に認知度が低いのではないかと。情報発信が単なる告知にとどまっているのではないかと指摘もありました。魅力を伝える発信が必要で、ホームページはもちろん SNS とか、アカウント数やフォロワー数など、若い世代に届く強化発信をすることで、参加者の裾野を広げていただきたいというところです。

まとめます。部会は 2 つの大きな課題を改めて確認したところです。第 1 に成果指標と現場の実感の乖離、ギャップがあるというところですね。第 2 に、対象世代への具体的なアプローチ不足があるのではないかと。これらを克服するためにはアンケート手法の見直し、対象者の見直しが必要で、新規層の開拓をどのように進めていくかという方向性が議論に上がりました。

以上が議論を踏まえた報告となります。ありがとうございました。

■岩永会長

ありがとうございました。逐一ごもっともという感じのご意見だったと思います。特にアンケートを取ったときの回答の問題は永遠の課題でありまして、やはり回答する人はそれに関して意識が高かったり興味があったりする人が非常に多いのです。中心になることがあって、回答者の固まりからして、良い結果になる、良い評価になるということが見えているのではないかということがどんな場合でも言えます。お願いしたのに票を返さなかった人というのは、ネガティブな評価をしている人が多いのではないかということは十分考えられますので、これはこういう形で評価調査をしたときの宿命といいますか、永遠に解決することが難しい。もうこれを解決するためには1対1のインタビューで参加者に聞くとか、そういうやり方しかなくて、とてもたくさんの人数をやることはできませんので、すごく難しい課題だなと思います。

こういう質的調査をやっている人もいますが、インタビューなんかで質的調査をやる人のやり方は名人芸みたいなものがありまして、例えばネガティブな評価をしそうだなという人にはネガティブな評価になりそうな問いかけをして、「いやあ、大変ですよ、スポーツは」とか、そういうところから始めていくとか、やり方はあるそうですけれども、こういう客観性が求められる評価の場合には、なかなか質的な調査は難しいし数が取れないですから、永遠について回る課題かなと思います。

それから、現場の実感と回答のよさのギャップは、これもやはり永遠の課題のような気がします。現場で見ているとネガティブな人とか、必ずしも評価していない人のありさまとか意見とか態度とか、そういったものも見ているわけですから、それと比べて回答が随分いいなという感じがするのは、これもむべなるかなという感じがします。

何か今の溝口副会長のご報告に対してご質問、あるいは付け加えとかがありましたらお願いします。——よろしいでしょうか。

ありがとうございました。こちらでも何か途中でありましたらお願いしたいと思います。3つの分野の評価結果の説明をしていただきました。ありがとうございました。

ここまで3分野の評価結果についてご説明していただきましたけれども、これからもっと自由に、分野を限らず質疑応答、意見交換の時間とさせていただきたいと思います。とはいえ、各報告に対しての意見も質問もなかったのも、ここから質問や意見がばんばん出てくるとは思えませんが、もっと自由に、長い時間議論していただいたということもありますので、そのプロセスの中であったこと、感じたこと、短い時間でまとめるの中には入らなかったけれども、こんな意見もあったんだというようなことがありましたら、どんなことでも結構ですのでご意見を頂きたいと思います。いかがでしょうか。ないですか。

私の大学のときの先生はとても話が下手な人で、20分ぐらいするとみんな眠くなってしまっただけで耐えられなくなったのですけれども、その先生いわく、「眠くなったら質問しろ」と言っていたんですが、何か自分で行動を起こすと眠気が飛んでいくということらしいです。

よろしいですか。一応、種はまきましたので、では、先へ進めさせていただきます。

次の議題に入らせていただきたいと思います。事務局から何かこれまでのところの補足説明はありますでしょうか。この評価報告書案について、今後どのように扱うかということも含めてお願いします。

■事務局（中央図書館長／3分野連携担当課長）

ありがとうございます。こちらの評価報告書案ですが、本日お示しさせていただきますので、こ

の後、実際に事務局のほうで最終チェックを行いまして、最終的には議会を通して公表するような形で考えております。スケジュールといたしましては、11月頃には整えて最終的には公表する形としたいと思います。こちらは今後の新計画策定に向けた際の基礎資料にもなってまいりますので、報告書として完成しましたら引き続き皆様にはご活用いただきまして、今後の新計画の議論にお役立ていただく形で使ってまいりたいと思っております。以上となります。

■岩永会長

ありがとうございました。この報告書案ですけれども、先ほど大久保さんも含めて3名の部会の代表の方から説明していただきましたが、その文言についてはどこかに入るのですか。この表だけですか。

■事務局（中央図書館長／3分野連携担当課長）

そうしましたら、今は表だけでまとめてしまっておりましたので、皆様にご相談でございますけれども、部会長からコメントいただいた内容も盛り込んで、もう少し具体的に課題ですとか新計画に向けた方向性を埋め込ませていただければと思いますけれども、いかがでしょうか。

■岩永会長

私としては、ぜひそうしていただきたいと。これは数字が並んでいるだけだと、どういう議論で、どういう評価でこうなったのか、良いのか悪いのか、随分4が多いねとか随分3が多いねというだけで終わってしまうので、それぞれいろいろ考えて、いろいろ評価して、その末の3だということ、その末の4だということが分かるような説明がやはり必要だと思うのです。簡潔に3つの説明がありましたけれども、それがピラでこの辺にしていると、すごく読むほうもこの評価がどういう意味なのかなということが分かっていると思うので、ぜひ。

部会長の方々には負担をかけることになるのですかね。それとも、今日お話しいただいたことを速記ではないですけれども記録してこれにつけるというやり方で大丈夫ですか。

■事務局（中央図書館長／3分野連携担当課長）

そうしますと、ご相談というかご提案でございますけれども、今、岩永会長におっしゃっていただいたようなやり方でここに盛り込ませていただいたものを各部会長にご確認いただいて、最終的には岩永会長にご承認いただいたものを確定とさせていただくような進め方ではいかがでしょうか。

■岩永会長

私はいいと思いますけれども、当事者のお二人は大丈夫ですか。

■西岡副会長

はい。

■岩永会長

ありがとうございました。思いつきみたいなご提案をさせていただきましたけれども、せっかく報告書の形にまとまっても、「あ、数字が並んでるな」だけで終わってしまっただけではつまらないと思います。ぜひよろしくお願いいたします。

それでは、まだまだ議論し足りない部分はないと思いますので、質疑応答は以上とさせていただきます。事務局からの今後の報告書の扱いについて、それから私の修正意見のようなものも聞いていただきました。それで進めていただきたいと思います。

それでは、今日の大きなテーマの評価ということについては一旦以上とさせていただいて、この報告書の完成をもって、議会への提出をもって、この評価については一旦終了ということとさ

させていただきます。

3 アンケート調査票案について

(1) アンケート調査票案

(2) 質疑応答

■岩永会長

続いて次第の項の第 3 番ですけれども、アンケート調査票案について、事務局から説明をお願いします。

■事務局（中央図書館長／3 分野連携担当課長）

それでは、私からアンケート調査票案について簡単にご説明させていただきます。本日は森村先生にもお越しいただいておりますので、私の説明は簡単にさせていただきます、森村先生からコメントを頂ければと思っております。

お手元の資料 3-1 と 3-2、こちらがアンケート調査票となっております。3-1 が 16 歳以上の一般区民向け、3-2 が小学校 5 年生と中学校 1 年生向けとなっております。基本的には 3-1 と 3-2 で質問のつくりとしてはそれほど大きく変わってなくて、3-2 については質問項目を絞って、かつ平易な表現にさせていただきます。ですので、基本的には資料 3-1 に沿ってご説明させていただきます。

こちらのアンケート調査ですけれども、今回で文化・読書・スポーツのアンケートは 3 回目となっております。既に実施してきたものがございますので、その経年変化を取る意味もありまして大幅な変更はしておらず、今回部分的に修正した箇所のみを色つきで表示させていただきます。ですので、そちらのみご紹介させていただきます。

資料 3-1 をお開きいただきまして、2 ページになります。こちらのピンク色で網かけをしているところが 3 分野共通の質問事項となります。2 ページは基本属性の部分になりますが、先ほど申し上げましたとおり、こちらについては問 3 に居住年数を新たに追加させていただきます。

3 ページ以降が各分野に関するものになりますけれども、資料の見方といたしまして、緑色が文化の変更点となっております。例えば 3 ページのところは、文化の質問からコロナウイルスに関する選択肢が入ってございましたけれども、そこを削除したということで、このように表示しております。

4 ページは、読書、スポーツ、それぞれに変更がございますけれども、読書が黄色、スポーツが青で表示しております。こちらは若干の文言の修正ですとか、同じような形でコロナウイルスの選択肢を消したというものになります。

5 ページから 7 ページにかけてが文化の質問になりますが、文化については今回大きく修正はしておりません。追加しましたものといたしましては、先ほど西岡部会長からもご紹介がありましたように、文化芸術については情報発信が一つの課題になっているということで、問 13 に情報を入手した媒体を新たに聞く形で質問を追加させていただきます。

6 ページについては、若干の文言変更ですとか軽微な修正となっております。

続きまして、読書分野の変更点について簡単にご説明いたします。8 ページ以降が読書となります。読書につきましては、若干の文言の変更をさせていただいているところと、新たに追加したところ、それぞれございます。8 ページについては、文言ですとか選択肢の追加という形になっております。

9 ページの間 25 以降に具体的な図書館に関する質問を入れさせていただいております。こちらについては、読書分野においては令和6年から区立図書館の見直しを本格化させたということで、実際の図書館の利用状況ですとか図書館に関する区民の方の意識、そういったものをより深掘りしたいということで、25～28 までの質問を追加させていただいております。背景といたしましては、図書館の見直しに当たって令和7年6月にアクションプランというものを作成しましたので、そのアクションプランに沿うような形での質問を入れさせていただいております。具体的には図書館の居心地を尋ねる質問ですとか、図書館があなたの生活にとってあってよかったと思いますかですとか、そういったものをさせていただいております。

11 ページ以降の青色の部分がスポーツのアンケートとなっております。スポーツについては一番新規の質問が多くなっておりますが、今日はお時間の関係で個別のご紹介はないのですが、基本的にはスポーツに対してどのような意識で取り組んでいるかという質問を多く入れさせていただいております。理由といたしましては、これまで実施しているかですとか関心があるかというところのみを聞いていたのですが、その背景にあるスポーツに対してどういう意識を持っているか、どういう意識で取り組んでいるかということを深掘りして、今後の施策ですとか事業に生かしていきたいというところで、所管課のほうでそのような形で追加させていただいております。

それ以降につきましては共通の質問になりまして、冒頭で申し上げましたように、前回、令和3年度のときにコロナウイルスに関する質問を多く入れておりましたので、そちらを削ったところが主となっております。

私からのご説明は以上となります。

■岩永会長

ありがとうございました。

森村先生に追加のご説明をしていただく前に私からの質問なのですが、例えば 5 ページの、どのような手段で文化芸術の情報を入手していますかというのは、特に 1 と 2 はどのように意識されるでしょうね。SNS もインターネットだろうという人もいるし、ウェブサイトや LINE がないのはどういうことだとか、この辺は難しいのかなと思いますけれども、その辺はもう議論されているのですか。LINE は結構多いと思いますよね。それが一つ。

それから、みんなが回答できるようにというか、理解してもらえるようにルビを全部に振ってあるのですが、これは考え方ですけれども、昔の戦前の新聞みたいに全部ルビが振ってあると、我々にとってはちょっとうっとうしいというか、特に 10 ページの「居心地」なんていうのは少しバランスが悪いというか、ついているものとついていないものが出てきたりして、これはよく分からないなというのがあって、一つの問の中で 1 回ルビを振れば、同じものには振らなくてもいいのではないかなという気もしないでもないのですが、かえってそのほうが原稿を作るのが大変だということだったら、それは全然構わないですが、「とても居心地がよい」の「居心地」は何かの関係で消えてしまったのですか。それから、その前の 9 ページの間 25 の図書館のところは一切ルビがないとか、全体としてその辺のところの徹底が少しぬるいような気もしないでもないということです。すみません、ぱっと見た感じで、思いつきで質問してしまいました。それは後で説明してください。

それでは、本日は森村先生にご出席いただいておりますが、森村先生は、一番最初のアンケート作成のときは私 1 人だったのですが、途中から分析に関して加わっていただいております。

して、もう 4 年目か 5 年目になるのです。こういう会に出ていただいたのは今年からなのですけれども、既にアンケートの設計とか分析というところでは、非常にこの足立区の 3 分野に関してよく習知されておりまして、そういう意味で、これは続けるべきだとか、こういう問いも入れるべきだとか、これは要らないということ、恐らくこの中では一番よく分かっていらっしゃるのではないかなと思ひまして、ご協力いただくことにしました。今日は森村先生にこれから行うアンケート調査について、このアンケートをより効果的なものにするためのご意見を頂きたいと思うので、7 分程度と限定しておりますけれども、申し訳ございません。ご意見を伺いたいと思います。よろしくお願いします。

■森村氏

ただいまご紹介いただきました外部参加者の森村です。

岩永会長のご紹介に少し追加というか訂正というか、私は本件のアンケートの項目設定・設計には関わっておりませんので、少し見当違いのことを申し上げるかもしれませんので、その辺は事務局から適宜ご訂正いただければと思います。その上で、7 分ということなので 7 点ほど指摘させていただきたいと思います。調査票についてということだったのですけれども、調査全体に関わることも含めてお話しさせていただければと思います。

まず、サンプル数が 8,000 から 3,000 という記述というかご説明があったかと思うのですが、これは配布数ですよね。配布数が前は 8,000 で有効回答率が 36%、有効回答数が 2,849 で 3,000 弱です。一般的にサンプル数というのは有効回答数のことを指すので、前回は 3,000 弱。今回、仮に前回と同じ 36%だとすると、3,000 人の 36%で 1,080 人。なので、多分そういうことでサンプル有効回答数 1,000 を目標に設計されたのではないかと思います。1,000 というのは少ない数ではないです。ただ、社会調査の危機と言われて、ご存じのとおり個人情報回答したくないという傾向が日々強まっておりまして、回答率は低下傾向にあります。なので、コロナ前と同じ回答率を確保できるかどうかというのは分かりません。ただ、一般論で言うと、コロナの前に毎年意見を言えていたのに、中断したことによって久しぶりの調査でぼんと跳ね上がるという現象は確認されております。分野によるのですが、なので、もしかしたら今回は上がるかもしれないのですが、いずれにしろ有効回答者数ということで言うと、取りあえず前回と同じ目標だとすると 1,000 だということです。

その前提でお話ししたときに 1,000 人で少ないかということ、先ほども申し上げたとおり、1,000 人いれば一応一般的には一通りの分析ができます。推計値でも 3,000 人が 1,000 人になって 3 分の 1 の精度かということそんなことはなくて、専門的には 1.6 倍分、正確性というか信頼区間というのは広がるのですが、平均値ということで見れば技術的にはあまり問題ありません。

この件については事前にご参加の委員からもご質問があったかと思うのですが、1 つ確実に失われるものがありまして、回答者数が 3,000 人から 1,000 人になると、失われた 2,000 人の中で 1 人しかいなかったであろう希少意見がなくなります。ですので、多様性が失われます。これは確実に。そういった意味では、たった 1 人しかいない区民の声に耳を傾けるという意味では、確実にこの調査は劣化するということと言えます。一般論として、それをどう補うか。全ての調査に伴うことなのですけれども、一つの方法としては、自由回答欄を充実させることによって、そういった方たちの声をしっかり拾うことができることもあります。繰り返しになりますが、今回 3,000 人の配布ということは、私は妥当であると考えます。

次に 2 番目、子どもの対象年齢です。今回は 5 年生が対象。以前からかと思うのですが、6 年生

は別調査があるのでかぶらないように 5 年生ということで、これも結論から言えば妥当かと思います。というのは、家族調査等で子ども自身に回答を求める場合、おおむね 10 歳以上で妥当な回答が得られると言われておりまして、その意味では、5 年生、6 年生を対象とした調査ということでは妥当なものであると考えております。

先ほど岩永会長から平仮名のルビの件もあったかと思うのですが、少なくとも子どものほうに関しては全て振るということです。もう一つ、少し視点が違うかもしれないですが、文化的多様性ということを考えていらっしゃるのではないかなと思うのですが、そういった意味でも平仮名のルビを徹底するというのには意味があるかなということになります。少し話題がそれましたが。

ただ、別調査が 6 年生なのに対して、では 5 年生、6 年も 5 年も一緒だろうかというところなのですが、これは慎重に検討する必要があります。というのは、次の項目のところでも説明しようと思ったのですが、2023 年のこども基本法の施行によって、ご存じのとおり子どもの権利条約が改めて注目された中で、今回初めてこの調査が行われる。そうすると、権利主体としての子どもというものを非常に尊重するような流れの中で、「親が決めたから子どもが答える」「先生が学校でさせたから、子どもは有無を言わず従う」ではなくて、子どもは主体的にこの調査に参加し拒否する権利があります。調査自体もそうですし、項目ごとについてもそうです。ですので、少しそこを意識して、やはり 6 年と 5 年で 5 年生はぎりぎりかもしれないので、特にそこを意識する必要があるかもしれないということです。これが 2 つ目の、子どもの対象年齢。

3 番目は調査票について。調査票のところを拝見している限りは調査依頼文が見当たらなかったのですが、多分これは区のほうで別途ご用意されているかと思います。というのは、やはりそういった社会調査の危機ということが言われる中で、この調査に協力するメリットは何なのか。これに協力するというのは、自分は社会貢献することだという、そういう意識を持って、先ほども少しご指摘があったかと思いますが、意識の高い方が回答してくださる場合が多い。やはり、そういった方々のご協力は、ある意味ボランティアです。そういったご協力があつて初めてこういう調査は成立する。そういった方たちに向けて、区としてはしっかり皆様のお声を生かして政策実行していきます、改善していきます、結果はこういう形で皆様にフィードバックしますという、やはりそういった調査依頼文というものが極めて重要だということが指摘されておりますので、それも既にご検討済みかと思うのですが、一応ここで指摘させていただきます。

それに伴って、やはり子どもに対してどう説明するかということなのですが、今回改めて項目を見ますとセンシティブな項目が含まれております。子どもの調査票の資料 3-2 かな。問 16 のところです。「あなた自身についてお聞きします」「自分に、自信がありますか」というのは 3-2 ではないのかな。ごめんなさい、すぐ見つからないのですが、「何をやってもうまくいかないような気がしますか」というような、一般にこれはウェルビーイングとかストレスに係るような項目でして、これは場合によっては子どもにとっては答えにくい質問だったりするわけです。そうすると、やはり子どもさんご自身が答えたくないことは答えなくていいんだよというようなこと。親が言ったから、先生が言ったから、つべこべ言わず答えるんだではなくて、しっかりそこは——資料 3-2 の問 16 ですね。失礼しました。そういった設問も含まれている。

なおかつ、大人のほうでも経済状況に関するような項目が含まれていますので、やはりそういった途中離脱等も大丈夫だと。もちろん、調査実施側としてはそういったくないのですが、答えてくださる方々の主体的・積極的なご協力を尊重する、ご意思を尊重するという意味で、そ

ういった文言を入れることを将来的にもご検討いただければと思います。これが3点目。

4点目は設問数についてです。ざっくり言いますと、全体として多過ぎる印象があります。非常に多いと感じます。全体で、取りあえず資料3-1で今50問ですか。これは回答負担が結構大きいと思います。どのぐらいが適切かは難しいのですが、ごくごく一般論で言うと、40問を超すと非常に多いと感じます。今私の同僚がちょうど行政の施策の満足度調査の本を書き上げたので、つい先日もらったサンプルがあって、これを見ると全部で36問です。最後に「ご自由な意見をお書きください」というのに1ページ丸々取っています。

そういった全体的な回答負担として、3分野にわたるものを重複して聞いていくという構造自体に、どうしても設問数が増えやすいという特性があるので、それを踏まえた上で、やはり今回の施策実行に関するものを優先する。調査実施側として、ある項目を減らすのが断腸の思いというのは本当に分かるのです。私も全国調査にいろいろ関わってきて、2年とか4年とかをかけて10年に1回の調査を設計していくのですけれども、あったものを落とすというのは、その項目にすがって研究してきた人がいるのです。でも、十分な成果が出ていないものは切っていく。極めて重要と思われたけれども、そこから新たな知見が得られたものは切っていく。それよりも新しい視点を呼び込んで、新しい知見、新しい気づき、新しい施策につながっていくようなものをどんどん入れていくという考え方もあります。

なので、例えばなのですけれども、調査実施のたびに3割を入れ替えていくとか、全体の項目数を絶対に増やさないようにするとか、何かしら一定のたがをはめないと、スクラップ・アンド・ビルドの「スクラップ」は皆さんご存じのとおり利きにくいです。ビルド・アンド・ビルドになっていきやすいです。これは単に回答の負担が増えるだけではなくて、回答の質を確実に落とします。間違いなく回答の質を落とします。なぜならば、途中離脱者が増えます。離脱しなくても、途中から同じところを回答する人が増えます。これは間違いなく、研究がたくさんあります。

さらに言えば、最後まで走り切った方は、よほど足立区愛が強い方だという試練のようなものになってしまう。そうすると、回答者バイアスというものが発生してしまいます。やはり、すごく区政に対して言いたいことがある意欲が高い方だけが回答する。そうすると、本当に見たかったものからずれてしまうということがあります。ですので、岩永会長から1対1という、究極的にはそのとおりなのです。1対1で人と人が向き合って聞き出すというのが理想なのですけれども、その代用手段としてアンケートを実施するときには、可能な限り断腸の思いで項目を削っていく、身を削るようにして削っていくというのが一つの考え方だということになります。

次に5点目、性別の尋ね方なのですが、男女二分法でない点は評価できます。ご存じのとおり、もう政府調査等でも一貫してこういった方法が取られています。ただ、「無回答」という回答はちょっと珍しいです。1番が男性、2番が女性、3番がどちらでもない、4番は無回答とあるのですが、統計データの記述統計を単純にまとめたときに、回答のないものを無回答とまとめることが多くて、これは「無回答と回答している」のです。そうすると、無回答という回答をしたというのと、本当の無回答の区別がつかなくなる。うるさいことを言うなと思われるかもしれませんが、違って、性別に関しては、男女二分法以外の第3の選択を積極的に選んだ子どもたちのウェルビーイングとか問題行動が多いというのは先行研究で分かっています。内閣調査等で分かっています。回答しないのではなくて、積極的に二分法以外のものを選ぶことに意味があるのです。なので、そういった全国的な議論の流れを踏まえて、足立区さんとしても同じところにコミット

していくお気持ちがあるのであれば、やはり統計的な無回答と別に、一般的には「その他」とかなのです。内閣府がよく使う「その他（どちらともいえない・わからない・答えたくない）」というような回答は調べればすぐ出てきますので、それも今後ご検討いただければと思います。性別の件が 5 点目。

6 点目は問 49 のところですが、これは個人的にも非常に良い質問かなと思っております。と申しますのは、私も教育関係の施策が地域満足度を高めるということについて論文を書いております、それは私の研究でも確かめられております。さらに言えば、前回調査を拝見したのですけれども、非常に面白い傾向が出ていまして、足立区に愛着を持っている方は過半数なのです。ただ、誇りを持っているというのは、ちょっとスリムな感じになってしまう。ただ、愛着を持っている方が非常に多いということが前回既に可視化されている。その愛着というところと施策がどう関係しているのか、どう経年変化を経るのか、ここは非常に重要なところではないかなと思っております。なので、もともと入っていた項目なのですけれども、非常にすばらしいなと考えています。

その上で、ちょっとこれは余談かもしれない。問 49 のオのところ「食費や光熱費などの生活に必要不可欠な費用のほか、趣味や自分の楽しみのために使えるお金が充分得られている」という項目があって、これは実は重要かなと考えております。というのは、事前のご質問の中にも、所得に関する設問を入れられないかという、これは研究者としては一番欲しい設問なのですけれども、非常にセンシティブなので、誰もが二の足を踏むところなのですが、この項目は代用指標として使える可能性が高いです。なので、既に入っているのであれば、これを一つの代用指標として、経済的に少し苦しい立場にある方たちの傾向を明らかにするということはできるかもしれないです。ただ、惜しむらくは、有効回答数が 3 分の 1 になったときに、そういった少数者の方たちの傾向を拾いにくくなるので、私なんかは一番こういったところに興味があるのですけれども、ぜひここは今後もご活用いただければなと思っております。

その上で 7 番目なのですが、では、具体的に、多分どの辺を落としたらいいのかということを知りたいというお考えもあるかと思うのですが、結論から言うと、これはやはり市民者目線といいますか、地方自治の主権者である市民目線・区民目線で考えていただくのが一番大事だと思います。行政目線・研究者目線ではなく。

先ほど岩永会長からもご指摘があったのですけれども、最近のメディアの使い方に照らして、この質問項目はどうなのだろうとか、実は多々あると思うのです。皆さん喉元まで出かかっている。それを出していただくというのが、やはりこういう会の意義かと思います。そういったお声を拾って生かしていく、それを施策につなげていくというのは、ある意味、役所の手柄といいますか、そこにこそこういう会が開かれる意義があると思いますので、ぜひその辺、皆さんの良識といいますか常識的な感覚で、おかしいものはおかしいと声を出していただくということが重要ではないかなと考えております。

最後に、項目を減らせということと矛盾するかもしれないのですが、自由記述欄が非常に重要ではないかと考えておりまして、現状の自由記述欄は 3 分野に特定のテーマ設定された形での記述なのです。調査に関してなのか、事業に関してなのか、区政に関してなのか、それはいろいろな設問方法があると思うのですけれども、自由に書けるところをつくっておいたほうがいいと思います。特に、これは減らししても、正直多分今回は減らし切れないと思います。それはなぜかというと、調査が 3 分野にわたっているという構造的な限界性もあるので、そうすると負担の大き

い調査にお付き合いいただいた方からは項目数が多いというご意見とか、あとはネット調査で答えられた方によくあるのは、いわゆるスクロール地獄ですね。スマホで答える中で、よくあるのは、インジケーターがついていないので、どこまで行って終わるのか分からないスクロール地獄と言われる、終わりが見えないもの。最後にたどり着いたときに、もうお怒りで、全然ユーザーインターフェースを考えていない、ソースを見たらこんな古いものを使っているみたいなの、そういうお声を頂くような調査も多いです。なので、そういったことも含めて、そういうものは本当に貴重なご意見なので、最後までたどり着いて、なおかつご意見を頂けるというのは本当にありがたい機会なので、そういった方たちのお声を拾う意味でも、自由記述欄の充実をご検討いただければと思います。

大変長くなりました。申し訳ございません。以上です。

■岩永会長

ありがとうございました。いろいろな論点を出していただいたので、意見交換の時間があるかどうか分かりませんが、これから意見交換する際のきっかけになるかなと思います。特に今、森村先生に言っていた中で一番最初に言われたことは非常に大事で、要するに、これに答える人が、このアンケートは何のために、どんな目的で、これに答えることによってあなたにはどういうメリットがあるかとか、あるいは足立区の施策に対してどういうメリットがあるか、どういう返しがあるかというようなことが、「なるほど、それだったら協力してやろう」という気持ちを持っていただくというのが、こういうタイプの調査に関しては一番大事なことなので、ただこれがぼんちと行くだけではなくて、やはりこれはこういうことのためにやる調査なんですよということが簡潔に分かるような依頼文が絶対最初には必要だなと思います。そのとき必要なのは、なぜこれを聞くのかということが伝わるのが一番大事なことなので、そんなに時間がないですけども、それが分かるような文章を今後考えていただきたいなと思います。その際に、子どもだから先生が渡せばやるだろうという旧来の学校調査の延長線上の考え方は少し改めないといけないなということは、しみじみと私も思います。

ということで、大久保さん、時間の配分で、今アンケートの質問項目の意見を簡単に伺っていただいたほうがいいですか。それとも、これは今後、またそれぞれの部会でということになりますか。

■事務局（中央図書館長／3分野連携担当課長）

恐らく今回がアンケートについてご意見を頂く最後の機会になるかと思うので、この後の進行は時間のやりくりをさせていただきますので、ご意見がある方は、ぜひ頂ければと思います。

■岩永会長

それでは、私の司会の権限で勝手にさせていただきますが、この後、新計画の策定・3分野連携の推進に向けた総合的な意見交換をするという、グループでの意見交換の時間を取ってありますので、分けて取るととても時間がないので、アンケートの項目も含めてグループセッションにしたらどうかなと思いますけれども、よろしいでしょうか。

グループセッションで出た意見については、どこかで記録してもらえるのですか。

■事務局（中央図書館長／3分野連携担当課長）

記録させていただきます。グループごとに議事録を作らせていただきますので。

■岩永会長

分かりました。では、意見を言う方は意見を言うことに専念していいということですね。誰かが記録を取る必要はない。分かりました。

ということで、大変変則的で申し訳ないのですが、これから我々も入ってグループ形式での意見交換を 35 分ぐらい取れると思いますけれども、やっていただきたいと思います。内容については、今後の進め方、この 3 分野連携の推進に向けた意見でも構いませんし、アンケートのこと——取りあえずアンケートですね。アンケートのことについての意見を交換するということにさせていただきたいと思います。よろしくお願いいたします。

では、私たちも移りますので、よろしく。

■事務局（中央図書館長／3 分野連携担当課長）

そうしましたら、まず先生方にご移動いただきまして、ご着席いただきましたら、私のほうで全体の進め方を簡単にご説明させていただきます。

（会長・副会長 各グループへ移動）

■事務局（中央図書館長／3 分野連携担当課長）

それでは、今、中村委員が離席されていますけれども、お時間の都合もありますので、進め方のご説明をさせていただきます。

皆様のお手元に「「グループ形式での意見交換」の進め方」というものがございます。A4 判 1 枚のものになりますが、こちらをお手元にご用意いただいてもよろしいでしょうか。お時間の都合で要点だけご説明させていただきます。

今回、以前の全体会で部会ごとに意見を出し合うのではなくて、ぜひ分野横断した意見交換というご意見を賜りましたので、このような機会を設定させていただきました。その趣旨から申し上げますと、時間が圧縮してしまいましたので、2 番の「主なテーマ」のうち、1 つ目の「3 分野連携の推進に向けた、助言や提案」について、本日、主に意見交換させていただきたいと思います。もちろん、2 番目の「新計画の策定に向けた、課題や検討」ですとか、それ以外のもの、先ほどのアンケートに関するご意見等、何でも結構なのですが、できましたらせつかく分野をシャッフルしての意見交換になりますので、分野連携という視点で意見交換させていただければと思います。

進行は各テーブルに事務局が入りますので、事務局からさせていただきたいと思います。

お時間でございますけれども、今 3 時 23 分となりますので、グループでの意見交換をおおむね 3 時 45 分頃までやらせていただいて、そこから 5 分間で各グループの意見交換の結果の共有を事務局からさせていただきます。その後 5 分間、さらに全体での意見交換ということでお願いできればと思います。

雑駁なご説明ですが、早速進めさせていただきたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

4 新計画の策定・3 分野連携の推進に向けた意見交換

（1）グループ形式での意見交換

【A グループ】

■事務局（地域文化課長／生涯学習支援課長）

よろしくお願いいたします。司会進行を私のほうでさせていただきたいと思います。

先ほどの皆さんの発表を受けてでもいいですし、各部会で議論された内容も含めて、このテーマの中から 1 番の「3 分野連携の推進に向けた、助言や提案」という観点の中で、皆さんからご意

見を頂きたいと思っています。僕のほうで頂いた意見を簡単にまとめて、この辺に貼っていきますので、最後にこれをまとめながら発表につなげていけたらと思っています。

なかなか大きな場ではちょっとした疑問なんかも発言が難しいところもあったかと思うのですが、まずは部会の中で気になった課題であったり、こうしたほうがいいなという思いなんかを率直にご発言いただけたらと思うのですけれども、そうしたら木村さんから順番に。

■木村委員

それはスポーツ部会としてみたいな感じでお伝えすればいいですか。それで課題みたいなことを共有していく感じですか。

■事務局（地域文化課長／生涯学習支援課長）

はい。

■木村委員

承知しました。溝口部会長からも既に共有させていただいていたので、私のほうから特に。

どういう共有をしていくものなのですか。ざっくりし過ぎて、もう結構共有されていたと思うので。個人的な私の意見みたいな形ですか。

■事務局（地域文化課長／生涯学習支援課長）

個人的なところも含めて、はい。

■木村委員

承知しました。

溝口部会長にご説明していただいたとおりではあるのですけれども、私が見せていただいた中で、まず 1 点目としては、やはりアンケートの取り方というのは一つの大きな課題としてあったなと私自身も感じております。

でも、先ほど森村様からご意見を頂いているので、そこについてはここで深掘りする必要もどこまであるのか分からないのですけれども、先ほど見せていただいたアンケート調査で少し気になる点として挙げさせていただくと、11 ページの間 30 なのですけれども、例えばすごく特定の聞き方をしているなと思っていて、ここはすごく細かいところなので、ここで共有することなのか分からないのですけれども、例えば「障がいのある人と一緒に楽しめるプログラム」と書いてあるのですけれども、この限定、例えばなののですけれども、すごくざっくり言うと私も障がいを持ってはいるのですけれども、障がいをお持ちでない方が「障がいのある人と一緒に楽しめるプログラム」に○をつけるか。これをやりたいとわざわざ○をつけるか。別に障がいを持っている方たちが卑下しているわけではないのですけれども、この項目はどういう意図を持ってつくったのかなという。多分こういう項目が精査されているのかなというのは、正直アンケートをざっくり見せていただいているところがあつて。例えば「シニア向けの健康体操」とかも、極論を言うとシニアの方以外○をつけないですね。

だから、何を聞きたいのかなと思って、例えば足立区としての魅力的な運動プログラムとして何個か羅列されてあつて、それに対して○をつけるのは分かるのですけれども、「障がいがある人と一緒にやりたいですね、あなたたち」みたいに、何か意図しているのかなとは思いますが、ちょっと聞き方が雑かなと正直思ったりする項目が例としてあつたりします。なので、ほかのアンケートも見切れていないのですけれども、これをもう少し精査してほしいなと思っています。

もう 1 つ私が大きく思っているのが、この 3 者推進委員会の連携委員会として、文化・読書・

スポーツとしてさせていただいている中で、評価させていただいた中で思っていたのが、旧来のスポーツ推進委員のみだけの取組みみたいなことばかりだなと思っていて、3者推進委員の意義が今後ここに反映されるのかなみたいなことはすごく思っていて、多分アンケート調査とかも私たちのスポーツ部会では出ていたのですけれども、スポーツの関係者にアンケートを取っても、それは良い評価が出るだろう。なので、例えば文化であつたりとか読書の委員会の層の皆様にアンケートを取らせていただくとか、そういう工夫があってもいいのではないかなというのはスポーツ部会でも話をされていました。

取組としては今後の方向性とかに、3者の推進委員の、では読書とどういうスポーツが連携を取っていくのか、文化とどのように連携を取っていくのかみたいなことは、もっと取り入れてもらったほうが、私自身もこれがすごく魅力的だなと思って入った者の1人であつたりするので、そういう意味でもこれが今後どのように反映されていくのか、この3者推進委員会の意義というのは、今後気になっているところではあります。

少し長くなりましたが以上です。

■事務局（地域文化課長／生涯学習支援課長）

ありがとうございます。

■岩永会長

これもあれですよ。アンケートを何のためにやるかということがちゃんと合意できていないと。例えばこの間30も、具体的なことを聞いて、「ああ、そうか、ストレッチやヨガは人気があるんだ」とか、「だったら行政のほうでもその機会を増やそう」みたいな、そういう目的でやるのかなと思うので、それだとしたらこんな数ではとても足りなくて、もっと網羅しなければいけないのだけれども、そうではないと思うのですよ。スポーツの活動全般に対する興味・関心とか積極性とか、そういうのを聞くと。

極端なことを言えば、「あなたに自由になる時間があつたらどれをやりたいですか」で「文化活動、読書、スポーツ活動」の3つを聞くという、それもなかなか面白いのではないかなと思った。だって、スーパーマンみたいに、この3つ全部バランスを取ってやるという人を求めているのかなという、そうではないよね。

■事務局（地域文化課長／生涯学習支援課長）

そうですね。

■岩永会長

スポーツばかりやるとか、本が大好きで本ばかり読むとかいう人だって全然問題ではないし、むしろそういう人というのは、この3分野推進の一部に、推進するのではなくて目標の一部になっているのではないかなと思うので、先ほど木村さんがおっしゃったように、「こういうことをやるのが理想でしょう？」というのが念頭にあって、障がいのある人と一緒に楽しめるプログラムをやるのが理想で、その理想をあなたはちゃんと感じていますかということを知っているだけという感じがします。

これは、意図は分かるのだけれども、何のために取るかということをやちゃんと踏まえて作り替えないと駄目ですね。

■事務局（地域文化課長／生涯学習支援課長）

特にこれは「参加してみたいですか」なので、そうするとおっしゃったように、シニア向けの健康体操に若い人は参加しないので、例えば「関心があること」とか、自分の参加だけでなく、

そういうことがあったほうがいいよねとか、そういった聞き方であれば、こういうものを羅列して、もっと幅広くやって、こういうことにみんな関心がある、もしくは知っているというところの聞き取りだったら意味があるのかもしれないですけども。

■岩永会長

ストレッチとかヨガを本格的にやっている人は、1には○をつけないもんね。

■事務局（地域文化課長／生涯学習支援課長）

そうですね、逆に。

■岩永会長

家族がいない人は3に○をつけにくいし。

■事務局（地域文化課長／生涯学習支援課長）

そうですね。その置かれている状況によって変わってしまいますね。

■岩永会長

この辺に書きそうだ。「家族いないけど何か？」と書きそうな人が。

■木村委員

大体の人が「特にない」になりますよね。

■事務局（地域文化課長／生涯学習支援課長）

そうですね。

■小泉委員

思いつきでよろしいですか。

■事務局（地域文化課長／生涯学習支援課長）

はい、どうぞ。お願いします。

■小泉委員

設問が非常に細かくて多いなというか、先ほどのお話では、ある自治体では36ぐらいだとかおっしゃっていたけれども、それもそうなのだけれども、一つ一つの問いの選択する項目が非常に多いなと。何を求めていくのかというところなのだけれども、例えばですが問8のところ細かく書いてあるのだけれども、要は「親とか親族に連れられて行ったことがきっかけだった」とか、まとめられるのではないかと思います。「友人や知人から誘われて体験したことがきっかけだった」とか、または、事情はともあれ「公演を見たり展示会を目にして」とか、細かく聞かなくても「誘われて行って関心を持った」とか、「しよがないけれども親だとか親族に連れられて行って関心を持つようになった」とか、「たまたまそういう場面を見て関心を持った」とか、もう少しくくってもいいのかなと思ったし、あとは例えば5ページの問13ですけども、先ほど会長からもお話があったように、「観たり、聴いたりしたことがある」という人が、「あなたは、文化芸術の情報を、どのような手段で入手していますか」という問いになっているわけですけども、この項目は昔から使われているのだけれども、例えば先ほどあったように、SNSだってネットだっていろいろあるわけで、最近だったらYouTubeだとかXだとかLINEだとかFacebookだとか、若い人なんかはそういうところが圧倒的に多くて、紙媒体はどんどん減っているじゃないですか。新聞の購読も。「SNS」でそれをくくっているという言い方もあるのだけれども、分かりやすくするのだったら、そういう単語を並べておくとか。

■事務局（地域文化課長／生涯学習支援課長）

そうですね。括弧してとかですね。「(LINEやTwitter、TikTokなど)」と。

インターネットというのは、どちらかというと自分が検索して。

■小泉委員

検索です。検索サイトで調べるとというのがインターネットだと思うのですけれども。

■事務局（地域文化課長／生涯学習支援課長）

SNSは受動的に見ていると自然に入ってくる。

■小泉委員

自然に入ってくるという、そういうことによって知るということが結構あるじゃないですか。今はプッシュ型のいろいろな通知とかがありますよね。

■事務局（地域文化課長／生涯学習支援課長）

そうですね。若い方は結構そちらのほうが多いですね。

分かりました。アンケートに関しては、もう少し精査して。

■岩永会長

これは多分、若い人たちから見ると平成の薫りがするのです。令和の時代ではなくて、「まだこんなことを聞くの？」と。

■小泉委員

今は見たなくなつたって、PRとか宣伝はばかばか入ってくるじゃないですか。プッシュ型というのですか。

■事務局（地域文化課長／生涯学習支援課長）

そうですね。Yahoo!とかで入っても、どんどん動画が入ってきますからね。分かりました。

それでは、テーマのところで、誠に勝手ながら僕が一番関心を持っている——絞らないと漠然としてしまうかなと思っていまして、僕も今年から文化の担当になったのですけれども、今日もお話があったように、やるかやらないかというところで、もう両極端。やらない人は一切関心がないしというところで、どうやったら一歩踏み出してくれるか。恐らくスポーツも文化も読書も、多分全員がやったほうがいいよねと思っていると思うのです。ただ、やったほうがいいと思うけれどもやらないという。僕も個人的には本を読んだほうがいいなとか、歌を歌ってみたいと思うけれども、一歩出ないのですよね。そういったところに皆さんの経験とか。

■小泉委員

だから、例えば果物でも一口食べないと、食べ物は食べないとその味が分からないと思います。その一歩のお誘いというか体験というか、聞いているだけだとか見ているだけではそのよさが分からないし、そういう機会が多ければいいわけけれども、そこへ誘い込むというか、そういう。誘われないとなかなか、老人クラブの活動だって同じじゃないですか。「面白いよ」とか言われたって。

■事務局（地域文化課長／生涯学習支援課長）

どうしたらそういう機会へ参加するようになりますかね。

■小泉委員

例えば、障がい者スポーツでもそうです。最近ボッチャというのは友愛クラブ連合会なんかでこれからやっていくという。ボッチャのすばらしさは誰でも参加できるという、そういうこともやってみないと、ボッチャをみんなが楽しめるようになって、みんな知ると「いいじゃないか」という。今まで何もできなかったような人が参加したり、そういうところへどのように持っていくかという。

■事務局（地域文化課長／生涯学習支援課長）

ボッチャとか、やられたことはありますか。

■木村委員

はい、あります。

■事務局（地域文化課長／生涯学習支援課長）

それはどんなきっかけで？

■木村委員

それは誘いかもしれないです。お誘いいただいていた感じなので、別にボッチャがいいかどうか僕も分からないですけれども、皆さんがやりやすいという意味では手軽ですよ。でも、それが一つのスポーツというので、そういう意味で言うと、スポーツ部会のほうでも出ていた「パークで筋トレ」とかというのは身近でできるものの一つ、一歩としてはすごく面白いな思っていて、ウォーキングとかもそうなのですけれども、ただ、パークで筋トレとかウォーキングの課題は、結局、高齢者の方が結構中心になっていて、本当に全世代対象になっていないものが意外に多い。

あとは、ほかにも障がい者向けイベントとかも、結局、パラスポーツというくくりの中で話をしつつも、パラスポーツの世界が障がい者の方限定みたいな書き方に見えるのです。そういうところで文言の使い方をもうちょっと工夫する必要があるなというのは感じていたりしますし、なので、例えば方向性のところに「パラスポーツ」ではなくて「インクルーシブスポーツ」とか、そういった文言に変えたほうがいいのではないかとか、話も出させていただいているのですけれども、このアンケートとかもそうですね。書き方一つに丁寧さが無いというところが見受けられるので、それで一つ結構、区民の皆様も捉え方が全然変わってくると思うのです。

■事務局（地域文化課長／生涯学習支援課長）

発信の仕方というか。

■木村委員

発信の仕方、言葉選びというのにもうちょっと、それに対して一般の人がどのようにそれを受け取るのだろうかというのは、もうちょっと考えて使ってほしいなと思うところがちらほらとあるので、お願いしたいなというところです。

■事務局（地域文化課長／生涯学習支援課長）

まさしくその辺は当事者の方から、実際にそう思われる方から幅広く意見を聞かないと、事務局が考えるとどうしてもパラスポーツという一般的になじみのある言葉に全部集約されていって。

■木村委員

やはり、ボッチャとかもパラスポーツとしては面白いと思うのです。でも、例えば一般的なスポーツとして、極論ですよ、ボッチャで全国大会はないのですよ。なので、ボッチャをやる人もいれば、ほかの全国大会を目指せる、全国大会とか一般の方用のスポーツと融合させて一緒の場所でやるとか、そういう工夫があってもいいし、そうするともっと裾野が増えると思いますし、何でもかんでも「じゃあ、全員ボッチャやろうよ」ではなくて、同じ場所でみんながそれぞれの目標に向かってやる場を設定するとか、変な話、スポーツだけではなくて、例えば読書とスポーツと一緒にやる場があれば、もしかしたら面白いかもしれないし、絵を見ながらスポーツもできますという空間をつくれば、もしかしたら融合するかもしれないし、そういう発想がもっとないのかなというのは個人的に思ったりします。

■小泉委員

友愛クラブという老人クラブ連合会が、今度、東京都で大会をやるということで、足立区なんかも取り組んでいこうということで、そういう大会も出始めたのだけれども、聞いたところによると、要するに障がいということではなくて、年配でも比較的できるという、裾野を広げるという意味で誰でも参加できるということで。昔はゲートボールだとか、昔からのものはあったのだけれども、いずれにしても体験しやすいとか誘いやすいとか、スポーツ人口なんかも増やすにはそういうことが必要なのかなと思いますけれどもね。

■木村委員

どうでしょうか。

■古瀬委員

この委員になって、足立区民として結構区報を見たり、いろいろな日々の生活の中で 3 分野ということをしごく意識して生活するようになりました。やはり、今おっしゃったようにきっかけ——私も足立区民なのですからけれども、ずっと職場のあるときは職場にしか目が向かない。でも、初めて区民として生活の全てを足立区で過ごすようになったときに、足立区に今何があるのだろうと。やはり身近なところでのきっかけ。きっかけは、それがスポーツだろうが文化だろうが芸術だろうが、自分が気に入ればそこに入っていくわけで、それが区立だろうが民間だろうが、それも関係ないなというのは日々感じています。

3 分野連携で最近一つ、これはやはりトピックスになるのではないかなというのはデフリンピックです。手話言語法ができて、デフリンピックが今度は 11 月に始まって、足立区は柔道と空手で、東京武道館で 2 競技持っていて、手話が言語なのです。私も一応ずっと手話をやっているのですが、言語で文化という切り口もあるのです。今度はデフリンピックでスポーツという切り口もあって、デフリンピックはまだオリ・パラに比べて知っている人も少ない中で、私は手話をやっているのですが、結構いろいろ足立区がどんな動きをしているか分かっているのです。でも、多分一般区民の方はまだまだ認知度というか、一緒にやっていこうというのは少ないので、せっかくやるデフは今度無料で誰でも行けるので、一つのきっかけとして、何か 3 分野連携の良いツールと言ったら失礼なので、良いきっかけのイベントになり得るのではないかなと思っています。

私は今民間のジムに行っているのですが、民間のジムは本当に 70 代ぐらいの女性のサードブレースなのです。「何々ちゃ〜ん！」みたいな感じで、毎日居場所を、70 代オーバーの方たちとか、男の人もいるのですが女性が多いのです。そのスポーツクラブの一角にコーナーがあって、そこにいろいろな民間が来て、例えば化粧品だったり健康器具だったり、いろいろなことの宣伝をするのですが、結構時間のある方たちを対象にしているので、私はあれを絶対に足立区も広報に、それを PR に、みんな休憩の時間を使ったりするので、ここの中にも「民間のジムを活用して」とあったのですが、足立区は広いので、私も総合スポーツセンターに行くよりは民間のジムのほうが。

■小泉委員

チョコザップみたいなやつだね。

■古瀬委員

そうそう。いっぱい今増えていますよね。そこで文化とか、3 分野連携のうまい PR をちょこっと。パンフレットとかも見るとすよね。だから、何かちょこっと区の方が行って PR するとか、それはいろいろな形でコラボはできるのではないかなと。日々の中で私が今感じていることなの

で、3分野と考えると相乗りできるところ、重なっているところがたくさんあって、結局この2つを自分はやっているじゃないかとか、そういうこともたくさんあるので、そういったあらゆる機会を捉えてやれば面白いのではないかなと。

■小泉委員

スポーツも、忙しい人は競技をやっているというのではなくて、それこそチョコザップだとかエニタイムへ仕事が終わって夜遅くに行っているとか、結構多いですよ。だから、一つの競技に打ち込んでいるというのではないのだけれども、自分はスポーツをやっていますよという人は結構、データではないのだけれども、身の回りで随分増えていますね。

■古瀬委員

見るのもスポーツだと。この間の世界陸上のように、見ることによってスポーツに関心を持つとか身近に感じるとか、見て楽しそうだからやってみようとか、いろいろなきっかけはたくさんあると思うので、必ず新しいスポーツを高齢になってやるというのは、きっかけとしてはなかなか難しいので、見るスポーツという視点ではデフなんかはいいかなと最近思っています。

■岩永会長

3分野の今までの実践の中で、「ぷち」のほうに、「ちょい」に行ったというのは一つの見識で、お二人の話と……

【B グループ】

■事務局（図書館サービスデザイン担当課長）

よろしくお願いいたします。私が書き取っていきますから、どうぞいろいろと語っていただければと思うのですけれども。

■傍嶋委員

では、僕から大丈夫ですか。文化の傍嶋です。よろしくお願いします。

アンケートについてなのですけれども、さっきの設問の数が50個ぐらいですかね、結構数があって、今これにQRから入ったのですよね。皆様入っていただくと分かるのですけれども、設問数が書いていなくて、僕、二十何問まで行ったのですけれども、いつ終わるのか分からない。だから、最初の段階で「何問あります」というのがあったほうが、これが100問あったら大変じゃないですか。結構次へ次へというのがどんどん切り替わっていくので、さっきのどこまで行ったか。

■事務局（図書館サービスデザイン担当課長）

スクロール地獄というあれですね。

■傍嶋委員

そうですね。今、自分でやってみてそれは確かに心配になる。特に時間のない方とか。あとは、例えば「およそ10分程度の」とか、質問の数とそれに関わる、どれぐらいかかりますよという。さっきおっしゃったようにまあまあボリュームがあるので、そういう説明があると、このQRで飛んだ人にはいい。紙で渡される分には最後まで見えるので、「このボリュームか」というのが見える。そこが気になりました。

■事務局（図書館サービスデザイン担当課長）

ありがとうございます。

■長沖委員

溝口先生の報告を聞いて、これは大変なことになったぞと思ったのは、文化部会はすごく謙虚

で、「出ない層を取り込む」という話はしないのですよ。分かります？ 「文化をしていない層を取り込む」という言葉を言わないのだけれども、スポーツ部会と読書部会は「できるだけ多くの人を取り込みたい」、何なら「全員にさせたい」という野望があるんですね。そう書いてあって、みんなの時間は 24 時間しかない上に、ほかにもしなければいけないことがあるのに、いやいや大変なことになったぞということがまず感想です。

それを基に「連携」と言ったときに、その連携とは何なんだ、どういうものがあるのかなと思いました。提案もあるのでありますが、取りあえず感想はそこにまずあって、3 分野が 3 個争っているのかなみたいなことです。

■中野委員

アンケートの件でもいいですか。何個かあるのですが、まず 3 ページ目の言葉の定義のところで、一番上にあるのですが、ここをしっかりと読む人は多分少ないだろうなと思って、重要な部分だけを太文字にしておくとかでもいいのかなと思いました。例えば運動・スポーツのところだったら「エレベーターとかを使わずに階段を使うこともスポーツ・運動に入るんだよ」みたいなところだけを太文字にしてあげると、ぱっと目で追えるかなと思いました。

あと、運動・スポーツのアンケートの 11 ページのところなのですが、追加されているのがここに追加ではないんじゃないかなと思っていて、特に 31 番とかは「運動・スポーツをする際に、どのような支援や環境があればより取り組みやすくなりますか」とあるのですが、取り組みにくい人前提の質問になっているなと思ったので、当てる人を「取り組みにくい」と思っている、例えば問 33 の「運動を実施していないよ」という人に当てる質問とかにする。

■事務局（図書館サービスデザイン担当課長）

位置がですね。

■中野委員

そうです。私が例えば運動とかをやっていたら、この質問が来ると、急に「はて？」となるなと思ったので、順番か設問の書き方を変えたほうがいいかなと思いました。

■事務局（図書館サービスデザイン担当課長）

そうですね。問 33 で 2 や 3 を選んだ人向けに用意するということですね。ありがとうございます。

■中野委員

あと、スポーツの方に聞きたいのは、32 番は「ボランティアとしての関心がありますか」というところを聞いていて、何かすごいピンポイントだったのが、何でボランティアについてというのをわざわざ出したのだろうというのが分からなかったの、スポーツの方に聞きたいなと思いました。

■田中委員

ボランティアがいないと大会とかが。

■中野委員

できないということですか。

■田中委員

はい。

■中野委員

なるほど。ありがとうございます。

■長沖委員

そういう意味では重要だね。

■中野委員

あと、最後ですね、16～17 ページの間 46 と問 48 が同じ、これは一つにできるのではないかなと思ったのですが、何か「近所の人とどのくらい付き合っていますか」と「足立区の人とどんな付き合い、つながりがありますか」というのが 2 つあるので、さっき 50 個を 40 個みたいなお話があったので、ここら辺を削除できるのではないかなと思いました。

■事務局（図書館サービスデザイン担当課長）

問 46 と問 48 ですね。

■中野委員

はい。

あと、問 49 が最後なのですが、**「足立区に愛着」「足立区に誇り」「足立区を人に勧めたい」**が、個人的にすごく悩むというか、同じことを聞かれているような感じがして、「愛着を持っている」と「人に勧めたい」の 2 つでいいのではないかなと個人的には思うのですが、誇りを持っているから人に勧めたいになるし、愛着を持っているから誇りがあるのか、そこら辺が減らせると、少しでもスクロール数が減るといいのかなと思ったという感じです。

細かく見るともっとありそうなのですが、一旦そこが気になりました。

■事務局（図書館サービスデザイン担当課長）

ありがとうございます。

■中野委員

どうぞ。

■田中委員

では、最後に。これについてですか。

■中野委員

アンケートでもいいですし、3 分野連携の話とかでも全然大丈夫です。

■田中委員

自分の分野以外のことが正直なところあまり分からないので、一応冊子とかは全部見たのですが、やはり「なるほどな」ぐらいにしか。

■西岡副会長

どこを中心にするわけではない、3 分野、アンケートのこの部分を中心に話したいというわけではないですね。

■傍嶋委員

そうですね。ざっくりばらんに、全体でもいいですし。

■事務局（図書館サービスデザイン担当課長）

何かほかの分野のことでも聞いてみたいとか、どうしてここは違うんだろうとか、そういった、せっかく今日は横断型の時間なので。

■西岡副会長

先ほど話されたことで、気になったというか、思いついたことは、文化芸術というのはあまり意識しないでも、知らないうちに鑑賞していたりすることがあるけれども、読書・スポーツに関しては、自分なりのきちんとした関わり方というモチベーションが必要なかなと思ったので、

その部分。例えばボランティアなんかもそうですね。スポーツの場合にはほとんど必要なのだけれども、文化芸術の場合は、大体専門的なものとか組織とかが既にあるので、分野によってかなり成立条件が違う。とにかくテレビをつけていて知らないうちに音楽を聴いているとか、そういうこともあるので、分野によって大分違いますよね。

■長沖委員

違いますね。

■事務局（図書館サービスデザイン担当課長）

受け身でも自然と日常生活の中にあふれているのか、主体的にこちらから取りに行かなければというところですかね。

■西岡副会長

あと、このアンケートの言葉というのはめちゃくちゃ難しいですね。これは何かアンケートを成立させるために大変なことだと。

先ほど岩永先生からあった、インターネットと SNS の違いみたいことなので、これも例えばコンピューターと携帯の違いみたいに思う人もいるかもしれないし、ここの話ではないけれども、インターネットということだったら、例えば作品をコンピューターで見るとか、そういうことだとインターネットという言葉はあるけれども、作品を SNS で見るということはないじゃないですか。だから、そういう違いなのだけれども、多分人によっても違う。

■傍嶋委員

最近は多分 Instagram で作品を見るというのもあって、それは SNS になりますね。

■中野委員

確かにそうですね。

■事務局（図書館サービスデザイン担当課長）

どんどん変化していっていますよね。こういうところがね。

■西岡副会長

そうですね。だから、言葉が違うと。

それで、その上に「文化芸術の情報を」と書いてある「情報」というので、これも取り方が物すごくいろいろあるので、アンケートをすごく、これは設問が難しいし、さっきのお話の言葉の説明ですよ、言葉の定義みたいなところにそんなものを盛り込んだらそれだけで、アンケートに答える気がしなくなりそうな感じが。

■長沖委員

大体、採用の面接とかですら、面接官が 3 人を超えたらもうめちゃくちゃですよ。これは質問している人がスポーツと文化と読書のひと区の人と 4 人から質問されているみたいな話だから、そもそもそうやっている以上は絶対 50 になってしまっていて、そこから組み立て直さないといけないのだらうなとは思いますが。積み上げ式では絶対に多くなってしまう。

■傍嶋委員

これは特に答えたからといってインセンティブがあるわけではないですよ。ゼロですよ。

■長沖委員

ないない。

■事務局（図書館サービスデザイン担当課長）

具体的に何かがあるわけではない。そうです。長期的なものですね。

■中野委員

結構設問も多いし、設問の中の項目も多いのでハードだなと個人的には思いました。

■事務局（図書館サービスデザイン担当課長）

何かズバツとここの項目がさっと優先順位的には、さっき「断腸の思いで」と森村先生がおっしゃっていましたが、でも、「ここを諦めるなら」みたいなものがあれば。

■傍嶋委員

本来だったら——これは全部、文化・読書・スポーツは別々のやつを入れているじゃないですか。本当はそれを全てコーディネートする人がいて。

■長沖委員

そうそう。

■傍嶋委員

そうですね。それで読書に移っても、スポーツに移っても、答える感覚が一緒のような。だから、ちょっとそれが見づらくしていたり、答えづらく、「あれ、また聞いたのにな」という。今は多分みんな合わさっていて、それを全体を通して、何かもうちょっと整理・整頓できるというとは思いますが。

■事務局（図書館サービスデザイン担当課長）

確かに、そうですね。けど具体的にどうやったらいいのかというところですね。

■西岡副会長

その前に、このアンケートは 3 回目だとさっきおっしゃっていたので、これまでの質問の形態からあまり変わってしまうと、回数による分析みたいなことができなくなる。

■傍嶋委員

あまり変えられないというのはありますね。

■西岡副会長

だから、変な話ですけども、このままそっとしておいて、一旦 3 回目を終えて、何か良い区切りの後で、次のことを考えないと成立しないことがあるかもしれない。

■傍嶋委員

それはあります。

■長沖委員

すみません、時間が短くなるので、連携事業について言っているんですか。

今日はみんなが集まっているので、正直に僕らの部会のことを説明すると、「どうやって相手に勝つか」ということを。それは僕しか言っていないのですけれどもね。でも結局、さっきの顧客の取り方の話と云ったら、新規はスポーツしているやつを引っこ抜いてきて図書館に入れるみたいな話なのでね、今の話は。

それで、そこで急に謙虚になります。読書というのはそんなに主体的でなくてもいいというか、大体脇役だったりすることがあるのです。スポーツするときにこれを読んでうまくなるとか、音楽を聴くときも解説を読んでおいたら急に聴き方が変わるみたいなことがあって、だから、何なら僕らは脇役でいいと思っているのですよ。

大体今までの連携事業は、スポーツの場所で本を置いてありますとか、例えば、本を読みに行ったらそこに足踏み装置がありますみたいな、並行で持ってきているけれども、全然そういう必要はなくて、「我々は脇役になりますからこっちをやってみませんか」みたいなものがあつたら、

もっと実が出てくるかなと思いました。

■中野委員

関連するものを置いておいてもらえればいいと。スポーツイベントの何かだったら、それに関わる小説とかが置いてあればいいという感じですか。

■長沖委員

そうそう。が一んと燃える曲の CD とかね。

■事務局（図書館サービスデザイン担当課長）

脇役というのは、すごく極端に言えば、「筋トレするのに良い重さの本です」とか、そういうぐらいの脇役ということですか。

■長沖委員

そのぐらいの脇役でも構わない。

■中野委員

それはめっちゃ読まれていない。

■事務局（図書館サービスデザイン担当課長）

野球の大会だから野球の本を持ってきましたといったときには、それは脇役？

■長沖委員

それで、「俺が俺が」にならないような脇を我々が考えればいい。

■事務局（図書館サービスデザイン担当課長）

脇をもっと意識をして、「読んでね」と思わずにもっと。

■長沖委員

ええ。

■傍嶋委員

今日話を聞いていて、一応今「ぷちカル」「ぷち」というのに変わったじゃないですか。これぐらい文化・読書・スポーツに関わることをやっている自治体はないと思うのですよね。その割には、連携事業というもののあれが小さいので、もうちょっと横断的な——これは夢のような話ですよ、やるかどうかは別として、例えば図書館が、調べたのですけれども 15 個あるのですよね。まずそこを全部歩くラリーを作りますとか。そうすると主役にします。それで、ウォーキングで、スポーツで万歩計をつけて歩きます。例えばそこでアートを絡ませるとしたら、例えば謎解きとか、トリックアートとか、分からないのですけれども。

僕はよく謎解きを作るので、今年も作らなければいけないのですけれども、取手の競輪場で「Cycle Art Festival」という自転車とアートのコラボレーションのイベントがあって、そこで回遊性を高めるために謎解きを作るのですよ。そうすると、みんなごろごろ勝手に歩いたり、その謎の中にスポーツ・競輪にまつわる謎を作ったりというのをやるのですけれども、中にはトリックアートを見ながら謎を解かなければいけないものだったり。

だから多分、分からないのですけれども、図書館がせっかくある、15 か所に結構均等にあるのですよ、見たら。

■西岡副会長

地域学習センターと図書館と一緒に。

■傍嶋委員

そう。地域学習センターも物すごくあります。

■西岡副会長

併設されているということですね。

■事務局（図書館サービスデザイン担当課長）

そうですね。基本的に併設です。

■西岡副会長

だから、必ず図書館は地域学習センターの中にあると考えて大丈夫です。

■事務局（図書館サービスデザイン担当課長）

基本的にそうになっています。

■田中委員

図書館と体育館は大体一緒ですよ。図書館と体育館も併設されています、地域学習センターには。

■西岡副会長

では、全部、地域学習センターの中に。

■中野委員

ないところもありますよね。

■田中委員

でも、ないところのほうが少ないです。2つぐらいです。

■事務局（図書館サービスデザイン担当課長）

体育館のほうが数は少ないので、幾つか、ないところはあるのですけれども。

■中野委員

なるほど。では、私はそこしか。そこに住んでいるかもしれない。

■田中委員

ほぼ併設ですよ。

■事務局（図書館サービスデザイン担当課長）

ほぼ併設だと思って大丈夫です。

■傍嶋委員

そういう大きいイベントがあれば、何かそこでこういう、みんなが一緒になって一つの物事を解決する、そこに例えば文化の、今ボトルネックになっている課題があるわけです。例えば、伝統文化に関する関わり合いが足りないならそればかりを散りばめて、全部ネガの部分を取りあえず1回で解決できるような。

■西岡副会長

テーマを設定する。

■傍嶋委員

テーマを、ここで我々が困っているのを全部そこに1回で集められるような工夫があれば。

■西岡副会長

年に何回かやって。

■傍嶋委員

年に何回か。何かみんな急にアンケートが上がるという。伝統文化に触れ合ったし。

■長沖委員

きちんと太鼓を叩かないと、そのゲートを通過しないと。

■傍嶋委員

そう。通過しないとか、ゴールポストにボールを入れないと進めないとか、何か。

■西岡副会長

だんだん、たけし城みたいな。

■傍嶋委員

風雲たけし城。何か楽しいという、導入で、例えば集客と動員数を増やしたり、ちょっとしたきっかけですよね。「ぷちカル」でしたっけ、それプラスアルファ、せっかく長くやっているの、そろそろ予算をつけて何かやってもいいのではないかな。せっかくガチッとみんなで……。

■事務局（図書館サービスデザイン担当課長）

全部サブでというのがすごく面白いなと思って、全部脇役みたいな。

■傍嶋委員

全部脇役で、みんな主役。

■事務局（図書館サービスデザイン担当課長）

テーマは例えば謎解きみたいな。

■傍嶋委員

何でもいいです。

■事務局（図書館サービスデザイン担当課長）

そういうことになってしまうと、全然この 3 つに何も興味のない人が、気づいたら取り込まれているという。すごい、3 分野全部脇役。

■傍嶋委員

というちょっとした意見です。

■西岡副会長

ウオーキングだけでもいろいろなことが、それだけでも意味があるし、例えば最短距離みたいなこととか、どこからどう歩けば全部制覇できるかとか。最短距離みたいなことでもいい。

■傍嶋委員

そういった遊びができるといいですね。だからこそ今回みたいに課題がこうやって、ここはアンケートが低いとか、結構そこをピンポイントに狙ったイベントをやっても面白いのかなと思いました。

一応、僕、常磐線の JOBAN アートライン協議会のイベントをやっていて、JR の忘れ物傘をもらい受けて、今年は 2 か所しかしないのですけども、去年は 4 区 4 市ですね、台東区から取手までの各 8 自治体に忘れ物傘を持って行って、子どもたちを集めて絵を描くのと、あと藝大生が傘のライブペイントをするのと、藝大を出た音楽家を連れてきて歌を歌ったりバイオリンを弾くというイベントをやって、そういったみんなが来て一遍にいろいろな自治体も関われるというのはコーディネートしていたので、だからどれが一番というわけではなく、文化・読書・スポーツが「いっせいのせ」で課題解決できるようなイベントがあると、よりこの会というのが一体感が生まれる。

■長沖委員

確かに。

■事務局（図書館サービスデザイン担当課長）

そうですね。面白そう。

■傍嶋委員

みんなでやろうよという感じにはなると思いますね。

■事務局（図書館サービスデザイン担当課長）

一挙解決ですね。すごい。

■傍嶋委員

誰がやるかは分からない。誰かが勝手にやってくれば。

■事務局（図書館サービスデザイン担当課長）

あと5分ぐらいまだ時間がありますが、どうでしょう。

■長沖委員

それで思ったのは学校なのですね。読書の評価が高いのは、我々の自己評価が高過ぎるのではなくて、学校教育ではすごく読書のことを詰め込んでいるので、小学校とかでもげたを履いているのですよ、評価の中で。けれども、スポーツとかをガリガリやっている学校は公立では多分、前は分からないけれども、小学校レベルでは減っていて、文化も先生が熱心だったら来ているけれどもというのがあるので、それを利用していただいて良い感じというか、小学生は絶対に本は前より全然読んでいて、スポーツとか文化よりも有利なところにいたりするのでというのがある。もし使っていただければなと思いました。

■中野委員

伝統芸能が難しい気がしました。能とか雅楽とかが親しみにくいのだろうなと。

■西岡副会長

そうですね。それはなかなか本当に難しい問題で、ただ、文楽は千住でそれをして、成果は上がっているのですけれども、ただ文化芸術というのはある種、生活にかなり取り込まれないと持続性がないので。

まあ、全部一緒ですね、読書もスポーツも。生活の中の持続性をどうするかということですよ。最終的にはね。

【C グループ】

■事務局（中央図書館長／3 分野連携担当課長）

すみません、大分時間が短くなってしまいましたけれども、よろしくお願いします。

■中村委員

大久保さん、さっきのアンケートはテクニカルな話なので、事前に事務局と打合せしておきましょう。そうしたらもっと議論ができた。

■事務局（中央図書館長／3 分野連携担当課長）

申し訳ありませんでした。ちょっとそういったところで、時間が短くなってしましまして申し訳ありません。もうちょっと事務局で整理しておくべきところでした。申し訳ありません。

それで、先ほど申し上げましたように、分野連携ということで、ただ「分野連携といっても何なの？」というところがあるかと思うのですけれども、以前に部会・全体会の中で意見を頂いたのは、例えば「各分野でこういうことには困っているけれども、ほかの分野だったらこういうふうにやっている」ですとか、「読書ではなかなかここが進まないけれども、スポーツでこういうことをやっているけれども、どうか」とか、ほかの分野の方に意見を求めるですとか、あとはさらに、なかなか通常ですと、「読書部会だけでも、文化とかスポーツにもこういう意見を言い

たい」ですとか、そういったところでざっくばらんなご意見を頂ければと思っています。

あとは、3分野共通で課題として出たのが「情報発信」とか「きっかけづくり」、基本となるところがありましたので、例えばそういう単体の分野でやるよりも、3分野連携でこういうふうに関係発信していったほうがいいのではないかと、そういった視点でのご意見を今日は賜われればと思っております。あくまで一例ですので、何でも出していただければと思いますので、よろしく願いいたします。

その辺りで、いかがでしょうか。

■中村委員

このテーマの黒い四角のやつはどういう意味で見ていったらいいのですか。今のは連携ができる場所なのではけれども、この新計画に向けた検討とか課題とか、これはやらなくていい？

■事務局（中央図書館長／3分野連携担当課長）

恐らくお時間の関係で、ただ、中村委員がもしその真ん中のところで新計画の……。

■中村委員

いや、別にいいですけれども。

■事務局（中央図書館長／3分野連携担当課長）

どんなところでもご意見を出していただいて結構ですけれども、もし差し支えなければ、せっかくの分野横断ですので、そういったところを頂ければとは思っています。ただ、どこかところを頂いても結構ですので、一番最後の「その他」のところ、評価の仕組みに関するご意見というところでも、委員会の進め方でも結構ですし、何か今までご意見を出し切れなかったところで意見を頂ければと思うのですけれども、いかがでしょうか、その辺りで。

■溝口副会長

そうしましたら、お一人ずつ意見を頂いたほうが。もし、中村委員がよく、本当にご発言が多いので、中村委員からずっと聞くほうが、一方的だったから、あれば。

もしあれだったら、私から、皆さんに考える時間で、ブリーフィングで最初にやっていいですか。

■事務局（中央図書館長／3分野連携担当課長）

お願いいたします。

■溝口副会長

部会長さんのお話を聞いて、特に文化芸術のところ、スポーツと似ているなと思ったのは、富裕層の方は自分でジムだったりゴルフだったり、お金がかかる高価なソフトというのに届くわけなのではけれども、足立区はそれ以外、低所得者だったり、住むところ、結構格差が大きい町の中で、行けない人たちに、スポーツで「パークで体操」とかもそういうので、キッズなとか、すごく身近なところでやっていたりするんですね。

芸術は、すごくお金がかかるというか、むしろそういう層はすごく縁が遠いというか、どういうところで日頃の文化芸術と触れる機会を考えていこうというのが、何かご意見があれば伺いたいのではけれども。

■葛西委員

では、いいですか。でも、僕はそこを足立区さんはすごくうまくやられているなという印象があって、地域学習センターが物すごく活用されているなと思うのですよね。実際に私、今の会社の仕事で花畑のほうの地域学習センターさんと一緒にやっているのがあるのですけれども、地元

の、それを「文化」と呼んでいいのかどうかは置いておいて、地域学習センターで本当にいろいろなクラスがあつて、しかもそのクラスをその地元のおばあちゃんとか、例えばおばあちゃんの縫い物とか陶芸教室とか、そういう文化的な教室もいっぱいやっていて、結構にぎわっているのですよ。その辺は、もちろんそれでもある程度所得が制限されるかもしれないですけども、その部分というのは、足立区さんは結構学習センターが担っているのかなという印象は持っております。

■溝口副会長

その教室は無料なのですか。

■葛西委員

多分、教室によるかな。

■田島委員

有料が多いと思います。

■葛西委員

有料のものと無料の。基本は数百円とか取っていますね。

■田島委員

1回当たり数百円ぐらいで、多分8回で4,000円みたいな。

■溝口副会長

安いですね。

■中村委員

生け花教室がありますよね。

■田島委員

ありますね、それが文化という。

■中村委員

区民事務所か何かでやっている。

■葛西委員

ただ一方で問題は、部会でもお話ししたのですけれども、例えばヨガ教室とか、いろいろなものもあるのですよ。ただ、今、地域学習センターでやっている講座は全部「文化」で入っていると思うので、それもちっと違うかなというのは部会では。

私もその流れで、一つ議論のきっかけでお伝えすると、やはりこの間、僕は超陸上マニアなのですけれども、世界陸上を見ていて本当にスポーツっていいな、かつ羨ましいなと思って。読書と文化は、ああいうのがないじゃないですか。例えば、ああいうみんなで熱狂するみたいな。

■中村委員

地味なんですよ。

■溝口副会長

読書大会といっても盛り上がりませんもんね。

■葛西委員

ちょこちょこディベート大会とかいろいろあるとは思いますが、やはりあの世界陸上の規模を見ると、ごめんなさい、全然この話に合っているか分からないのですけれども、足立区さんだけでも、文化と読書とそれこそスポーツを絡めた区民大会みたいなものがあったら燃えるのかなと。

■溝口副会長

そういう意味では、今回の世界陸上で 2 つ面白いなというのが、足立区さんのテーマと似ているなと思ったのが、高跳びの選手が終わるたびにノートを書いたり、本を読んでいたりのすよね。空いている時間に。結構そういう選手がいるのですよ。私もそうだったのですけれども、選手のときに、落ち着かせるために日常を取り入れるのですよ。それで好きな本を。もちろん、みんな音楽というのがあるのですけれども、本だったり、書くという動作を入れると冷静になれるというのがあったり。

もう 1 つ、逆だったのですけれども、文化の力は金メダル以上だなと思ったのは、日本のリレー選手が「ONE PIECE」の決めポーズを 4 人で、ポーズのリレーをしたじゃないですか。

■葛西委員

ライルズが喜んだやつね。

■溝口副会長

ライルズが喜んで、彼らは走らなくても金メダルだと思った。文化の国を超越する力だったり、オタクしか分からない共通の文化のリレーというのは、スポーツを超えたところもすごくあったなと。

■葛西委員

それはそうですよね。確かに文化とスポーツの連携という感じですね。

■溝口副会長

そうなんです。新しい世代ではそういうのがすごく自然に、でも我々おばちゃん世代は「何だこれは、分からない」と思っていたのが、息子が「これ、すごいよ」と言って、そういう暗号ではないけれども、若い人たちがつながるそういうサインというか文化があるということにすごく感銘を受けました。

ほかに。

■田島委員

すみません、私、アンケートのことをすごくいろいろ言いたかったのですけれども、お時間がなくて。

■溝口副会長

いいんじゃないですか、アンケートも。

■田島委員

アンケートに所要時間とかを書いてもらったほうが、やる気が。すごく長くて、子育てしているママはここまで行けないのではないかなと。

■溝口副会長

その時点でね。

■田島委員

結構分厚いじゃないですか。「大体これぐらいだよ」みたいな感じで、「所要時間 約何分」と書いてもらったほうがモチベーションは上がるなと思ったので。

■溝口副会長

50 問だからね。学校のテストみたいですね。

■事務局（中央図書館長／3 分野連携担当課長）

オンラインなんかだと入れたりしているのですけれども、紙のほうも入れるように検討します。

■田島委員

入れてもらっていいですか。

あと、よく分からないのだけれども、10ページの27番の「区立図書館では気軽に相談ができますか」というのは、どういう意図なのかなというのが。

■事務局（中央図書館長／3分野連携担当課長）

図書館のサービスで、レファレンスという読書相談があって、自分の調べたいことがどんな本に載っていますかという、それに関して。

■田島委員

読書相談ということですか。

■中村委員

何の相談かなと私も思ったんです。

■田島委員

人生相談を図書館でできるんだなと思って。

■中村委員

それもいいかもしれない。あつたら。

■溝口副会長

ちょっと分かりづらいかも。区民からだ分からないかもね。

■事務局（中央図書館長／3分野連携担当課長）

ただ、今、図書館もどんどんサービスが広がっていて、究極、人生相談でもいいと思っているのですね。司書というのは、そういう区民の困り事の役に立つということで言えば。

■田島委員

でも、それだと答え方がちょっと。具体的に書いてもらったり、そういう場所があったりとか。これだとよく分からなかったの。

■事務局（中央図書館長／3分野連携担当課長）

私も分からなかった。

■田島委員

「相談って何？」みたいな。

■事務局（中央図書館長／3分野連携担当課長）

申し訳ありません、どうしても図書館の人間で、自分たちは分かっているつもりで書いていたのですけれども、そこは言葉を補いたと思います。

■田島委員

分かっている人にはちょっとあれかもしれないけれども。

■中村委員

何の相談かなという。

■溝口副会長

そういうところは大事ですね。区民目線というところでね。

■田島委員

生活しているとやはりこれはよく分からないので。

■中村委員

図書館の話をすると、図書館でちょっとスポーツを何かできるじゃないですか。例えば読み聞

かせ会とかをやっていて、その後「じゃあ、お母さんと子どもで、ちょっとスポーツをしましょう」とか、高齢者で座りっぱなしはよくないので、読書会とかでありますよね。その後「皆さん、軽く運動しましょう」みたいな。そういうのを組み合わせていくということも必要ですよ。

■溝口副会長

一緒にね。体操とかヨガだったりストレッチだったり。セットで。

■田島委員

「ちょいカル」「ちょいスポ」みたいなやつで、何かそういうイベントがよくある気がします。図書館とかで。

■中村委員

そういうのをやってもらいたいなと。連携できれば。できますよね。

あとは図書館でできるのが、足立区で「ベジチェック」というのをやっているじゃないですか。ああいうのをやってもらうといいですよ。要は「野菜が必要です。1日 350g」と。それで、ぴゅっとやると測れるですよ。そういうのを持って行って何かやれば健康が測れますよね。

■溝口副会長

いいですね。

■田島委員

私、図書館に毎週行っていて、ずっと使っているのですが、文化部会なのですが使っていて、使い勝手がすごく去年から悪くなってしまってます。

■溝口副会長

何ですか。

■田島委員

大変申し訳ないのですが、子どもとかで、本を1冊でも返さないとその時点で予約も何もできなくなってしまってます。

■溝口副会長

返却率が悪かったのかな。

■田島委員

多分悪かったからやっているのだと思うのですが、それは分かるのですが、子どもがもし図書館に本を借りに行ったときに1冊でも返していないと、もう行きたくないなと思ってしまったりするきっかけになると思うので、今、足立区の学力は残念ながらすごく低いので、その部分で、子どもだけでも緩和してもらえないかなと。ほかの区の図書館さんは知らないのですが。

■事務局（中央図書館長／3分野連携担当課長）

葛飾区とか、23区で調べたら、足立区以外の3〜4区はそういった形にしている、足立区は特に未返却の図書が多くて、どうしてもそこをとるのでやらせていただいて、難しいところなんです。

■葛西委員

難しい問題ですね。

■田島委員

でも、学習の部分でも、その前後でどう変わったのかというのを調べてもらいたいなと。借りる率が下がっているとか。

■事務局（中央図書館長／3 分野連携担当課長）

先日も議会からご質問があつて、それをやったことで（未返却が）2 割減ったのです。

■田島委員

それをどう思いますか。

■溝口副会長

やっぱり減っちゃったんだ。

■事務局（中央図書館長／3 分野連携担当課長）

未返却が。やはり皆さんそれだと「返さなきゃ」という意識が働いてですね。

一方で、今のご意見を頂いたのは初めてなので、それはそれで課題かなと思います。そう思わないように「じゃあ、早く返そうね」とか、未然の防止をよりこちらから働きかける必要もあるのかなと。

■田島委員

「返そうね」というのは分かる。予約もできなくなってしまうとか、それがちょっとどうなのかなと。子どもには厳しいのではないかなと思ってしまいます。

■葛西委員

子どもにはね。

■田島委員

大人はもちろん社会のルールなので、返したほうがいいのですけれども、どうなのかなと。

■葛西委員

全然違う観点の話をしてもいいですか。

■事務局（中央図書館長／3 分野連携担当課長）

何でも今日は。

■葛西委員

僕、ずっと思っているのですけれども、この 1 ページ目に、どの部会も、結局このプロジェクトは、人生 100 年時代を見据えて、文化・読書・スポーツが人生を豊かにするから足立区さんとしても力を入れていますよということだと思ふのですよ。だから、つまり足立区さんの考え方で、文化・読書・スポーツが、人が生きる意味だったり、好奇心だったり、そういうもの、楽しさの気づきというのがあるのですけれども、何かこれが、あまり楽しさが無いなと思つて。

■溝口副会長

熱量ですね。

■葛西委員

ごめんなさい、めちゃくちゃ抽象的な話なのですけれども、多分、中身でやっている方はいろいろな思いでやられていますし、足立区さんの各部署の方もいろいろな思いでそこにお金とか支援のサポートとか制度を出してやっていると思うのですけれども、何かこの評価委員の在り方にもその熱量——私は部会で結構意見を言わせていただいているのですけれども、やはり言いづらいというか、何か上から目線だなと思う部分もあつて。すごく抽象的で申し訳ないのですけれども、もっと評価制度まで含めて「足立区のやる文化・読書・スポーツって人生を豊かにするぜ」みたいなものがもっと表に出る報告のまとめ方とかはないのかなと思っています。それを落とし込んでいってしまうと結果的に報告書のデザインとかいう話になってしまうのかもしれないのですけれども、そこは常々、ただ我々の検討部会の中でも結局は「文化・読書・スポーツが人生を

豊かにするものなんだよね。それをみんなで底上げしていきたいよね」という思いはもっと共有していいのかなと。すみません、すごく抽象的な意見なのですけども。

■中村委員

私、この仕組みをつくったときの総合推進会議のメンバーだったのですよ。スポーツを担当していて、今ここにいるのですけれども、この理念をつくったのですね。それで、個別の事業は従来からの事業なのですよ。今まである事業を引き継いだのですよ。私、全部チェックしたのですね。新しい事業が3つしかない。従来どおりが11、拡充が9、だから20は従来どおりのやつなのですよ。ずっとそれをやってきて、今回評価をしますと。前から評価はしているのですけれども、評価が後づけなのですよ。評価が後づけということは、その施策の目標が後づけなのですよ。だから、この事業と施策目標の指標がリンクしていない。極端なことを言うと。

■溝口副会長

方向性がぼやけてしまう。

■中村委員

そういうことなのです。だから、そこをきちんと直さないと。理念に基づいた事業なんだと。そこが見えてこないのです。

■葛西委員

それは、本当に足立区さんはもっと強く言っていると思うのですよね。せつかくこれだけの冊子を作って、私、文化で足立区さんの事業にもいろいろ関わらせていただいている中で言うと、ここに書いてあることを果たして一個一個の指定管理者がどこまで理解して、そこにお金をつけてやられているのかというのは、正直僕ももったいないと思う部分が、もちろん言える・言えないとかはあると思うのですけれども、もっと大久保さんからもガツンと言ってしまっているんじゃないですか。

■中村委員

それは難しいよね。

■田島委員

それはお立場が。

■溝口副会長

中間管理職だからね。

■事務局（中央図書館長／3分野連携担当課長）

でも確かに、この計画をつくったときには、足立区の施設を管理している皆さんに「全て営業して歩け」という話があって、当時、全部アナウンスはしたのですけれども、6年、7年とたつて、ちょっとそこが風化してきてしまったところがあるかもしれないので、改めてこの計画をつくり直すときに、てこ入れしなければいけないなというのは思いました。

■溝口副会長

ある程度、4とか達成したものは先ほども言ったように切ってしまうでもいいと思うのですよね。

■葛西委員

アンケートと一緒にね。

■溝口副会長

それも含めて達成、合格ラインにいったところはよくて、新しい施策を、新規性がすごく少ないというところが活力とかにつながっていないというご指摘なのですよね。

■葛西委員

それもそうですね。確かに。

■溝口副会長

切るのが大変。

■中村委員

従来どおりの事業を続けている限りは発展性がない。だから、そこはきちんと評価をして、駄目なものは駄目で、別のものに変えていくとか、そういうふうにしていかないと駄目だと思うのですよね。

■葛西委員

そうですね。毎年各部会で、1つずつ切っていい、そして新たに好きなもの追加していい権利をもらえたりしないですか。

■事務局（中央図書館長／3分野連携担当課長）

スクラップ・アンド・ビルド権みたいな。

■溝口副会長

そこからあれだね、さっきも3割はという話があったから。

■葛西委員

それぐらいの権限をいただけたら、ちょっと楽しくなってきますよね。

■溝口副会長

「これを切ろうよ」みたいな。「これは達成できているよ」というような。

■葛西委員

「こんなのを追加しようぜ」みたいな。

■溝口副会長

ただ、スポーツなんかでは、国の指標自体が、「週に何回スポーツをやっているのか」という指標は世界的な指標になっているところなので、それは絶対に外せないというものも実はあったりするのです。

そういうのは文化とかにもあるのですか。読書とか。

■葛西委員

文化はないと思いますよ。

■田島委員

あるんじゃないですか。

■葛西委員

あるのかな。

■溝口副会長

「本は週に1回1冊読みましょう」とかは？ 分からないですけども。

■葛西委員

何かしらの指標はあるのかな。

■田島委員

ありそう。どうなんだろう。

■事務局（中央図書館長／3分野連携担当課長）

キーになるものというのはあって、図書館で言うと、図書館の基本指標というのは貸出冊数だ

とか来館者数という伝統的なものがあるって、読書ということかというと、1 か月に本を読んだ人の数とか、子どもでいうと「不読率」というのがあるって、読まなかった子の率というのを学校で取っていたりというのはあるのですけれども。

ただ、そういうのもどんどん変えていかないと、どうしても貸出冊数は、先ほど申しあげましたように、もう頭打ちというか、いろいろなエンターテインメントがある中で伸びることはもうない。なので、そこは測り方を変えていかなければいけないのかなと。

■中村委員

ちなみに昨日、セントラルスポーツの西新井に行って店長に確認したのですけれども、加入者の6割が男性で、4割が女性なのです。意外と男性が多いなと思ったのですけれども、そのうち65歳以上が30%なのです。ある誰かが調べてくれたのが、足立区で調べたら十数%だったのです。だから実際は違うのです。高齢者は3割以上なのです。日中は女性が多いのですけれども、それ以外は男性も来ているという状況らしいですね。そういうところでも文化的な、スポーツクラブに文化的な要素を何か入れるということもできますよね。

■葛西委員

それはすごく思いますね。

■中村委員

PR するとか、それもあるので。

■葛西委員

それはあるといいですよ。

■中村委員

人が集まるところにいろいろな、文化でも読書でも何でもいいと思うのですけれども、そこに行ったら何か PR するとか。

■田島委員

人が集まるところ。

■中村委員

そうそう。人が集まるところでできますよね。

■田島委員

民間にかかわらず。

■葛西委員

そういうのは何か、区の推進でね。

私も最近、40 歳を前にちょっとお腹が出てきて、ルネサンスに通っているのですけれども、読書コーナーとか、それこそ映画が見られるコーナーとかがあってもいいのになとは。それを区の事業でやってくれたらいいのにな、なんてよく思います。それこそ「ちょいカル」「ちょいスポ」「ちょい読み」ですよ。

■溝口副会長

静岡なのですけれども、逆に大きい都市ではないので、小さい市なのですけれども、そういう意味では、施設が共同で使うような、コミュニティセンターが全部丸抱えですよ。図書館あり、文化ホールあり、プールあり、ジムありなのです。

■田島委員

最高じゃないですか。

■溝口副会長

あるのですよ。今そこをスポーツ協会が指定管理していて、確かにそうすると、水泳をやった後に寄席のあれをまいて寄席につながったりとか、あとはジュニアオーケストラとかがスポーツ大会でやってくれたりとか、それでまた認知度が上がって、入りたいという子が出てきたり、今そういうところでリンクを。

だけど、足立区さんは財政もそうですし、大きい力があるだけに、縦割りになってしまっていることが、逆に連携できない。こういう部会はずごく、だから、そういう良い、何かソフトだけでも、今、中村さんがおっしゃったように、つながるような、リンクできるような仕掛けがあるといいですね。

■葛西委員

若干、ギャラクシティさんにその空気を感じますよね。何というか。

■田島委員

ギャラクさんはスポーツもやりながら文化も。

■葛西委員

クライミングみたいなのもありましたよね。

■田島委員

そうそう。あみあみとか。

■葛西委員

図書館は入っていないんでしたっけ、あそこ。

■事務局（中央図書館長／3分野連携担当課長）

図書館は、受渡し窓口だけは入っています。なので、一応あそこは文化もスポーツ的なものも図書館も一応。

■田島委員

でも、来年度でなくなってしまうので。3年間なくなってしまうので。

やはり人生 100 年時代で健康寿命を延ばすということが最終的な目標だと思うので、「医療費がこれだけ安くなりますよ」とか、そういうのも言ってもらったほうがいいなというか。

■溝口副会長

「認知症予防になるよ」とかね。

■田島委員

「認知症予防になって、みんなが健康で元気で長生きするための施策ですよ」というのをもっと、優しい感じではなくて、もっと言ってしまうでもいいし、そこの部分で生活が豊かになるのだったらよくないですか。ずっとがんになってしまったりとか、認知症で……。

■葛西委員

そうですね。

■中村委員

そうそう。だから、図書館で「ベジチェック」とかをやって、「こういう料理はこういうふうに作りますよ」とか、「栄養の高い食品の本はここですよ」とかいうのが……。

■溝口副会長

もう時間だ。あつという間ですね。

大久保さん、すごい仕事量をしていて、すごいですね。

■事務局（中央図書館長／3 分野連携担当課長）

いえいえ、たくさん意見を頂いてありがとうございます。

■中村委員

もっといっぱい言いたかったのに。

■田島委員

もっと言いたかったです。お時間が。

■事務局（中央図書館長／3 分野連携担当課長）

すみません、お時間が短くて。

（2）まとめ・共有

■事務局（生涯学習支援課文化・読書・スポーツ連携推進担当）

お話し中、失礼いたします。事務局です。まだお話し足りない部分も多いかと思うのですけれども、間もなく 45 分となりますので、これから各グループで意見交換していただいた結果につきまして、グループから 1 分程度で情報共有をお願いしたいと思います。

まず、A グループの江連地域文化課長からお願いしてもよろしいでしょうか。

■事務局（地域文化課長／生涯学習支援課長）

地域文化課長の江連です。

非常に 30 分が早くて、まだまだ出てくるだろうなというところではございますが、A グループとしましては大きく分けると 2 点です。1 つが、両方ともきっかけづくり、スポーツや文化等に触れるきっかけづくりというところから出てきた意見としましては、やはり発信の仕方に関しては、まだまだ工夫の余地があるのではないかとこのところでございます。特に受け手の受け取り方によって、例えば「パラスポーツ」と言うのか。パラスポーツと言うと、どうしても障がい者のスポーツという印象でございますけれども、「インクルーシブスポーツ」という発信の仕方のほうがいいのではないかと、そういったところはまだ検討の余地があるのかなと思っております。あとはきっかけづくりとしまして、より身近でできる競技であったりとか、デフリンピックがこれからありますけれども、見るスポーツから入ってくるきっかけづくりであったり、体験してもらう機会をどんどん提供していく。

僕も聞いていて思ったのは、ここでチョコザップの話も出たのですけれども、僕も実は 1 月からチョコザップに行っていて、入会費 3 か月無料とか、スターターキットプレゼントとか、そういったお得感、「今やるとお得だな」みたいな、ここで話は出ていなかったのですけれども僕の感想としては持ちましたので、区としてもまだそういったところの伸び代はあるのかなと思いました。

あとは、スポーツクラブに今はご高齢の方、特に女性が多いよという話がありました。スポーツクラブの中には PR ブースみたいな、イベントブースみたいなところがあって、やはり毎日来るご高齢の方もいらっしゃるのです、そういったところも今まで足立区で手を出してこなかった部分だったりもしますので、そういったところにスポーツでもあり、文化も読書もそういうところに入っていけると、皆さんの生活の場にもっとよりなじんでくるのかなというところではございました。それが今のところのきっかけづくりのお話でございます。

もう 1 つが、区の事業としてももう少しこういったところがあったほうがいいかなというもので

ございますが、一つはボッチャとか、今取りかかりやすいというか、触れやすいというところでボッチャが足立区の中でもたくさん出てきていますけれども、ボッチャというのは、やはりどうしても全国大会とか何々大会という上位大会があるわけではないので、例えばもっと積極的にやりたいのであれば、もう少し全国大会のある目標設定ができるスポーツなんかも考えていったほうがいいのかなと思いますし、足立区の事業を検討して数値が出ている中で、古くからの事業はやはり一番多いよねと。スポーツ推進委員さんとか青少年委員さんとか、足立区とずっと関わり合いのある皆さんとお話ししているだけでなく、新たな視点を取り込みながら若者のニーズにも、いろいろなニーズに触れながら事業展開していくと、もっと広がってくるのかなみたいな話もございました。

あとはアンケートのほうもいろいろ意見は出ましたので、その辺はまた振り返りながらブラッシュアップしていきたいなと思います。

A グループは以上です。ありがとうございます。（拍手）

■事務局（生涯学習支援課文化・読書・スポーツ連携推進担当）

では、続いて河合サービスデザイン担当課長よりお願いします。

■事務局（図書館サービスデザイン担当課長）

こちらの B グループは、アンケートについての具体的なご意見もいろいろ頂きました。こちらは一箇一箇ご紹介はしないので、また議事録などで見ていただければと思います。

連携事業のほうですけれども、こちらのチームでは 3 つのキーワードが出てきました。1 つは「謙虚」、それから「受け身」、そして「脇役」というキーワードでいろいろとお話が盛り上がったのですけれども、文化だ、読書だ、スポーツだ、それぞれが主役で何かを考え、脇役があるという考え方で考えるのではなく、3 つとも全部脇役になるような企画を考えていくと、うまく回るのではないかというアイデアでした。

例えば、図書館は足立区内に 15 館あるのですけれども、15 館の図書館を全て歩いて回るラリーはどうだと。目的は「歩く」なのか、図書館に行くこと自体は目的ではないので、図書館の中そのものが目的ではないので図書館は脇役なのだけれども、歩くだけが目的でもない。歩くのだったら、もっと別のところでもいいじゃんというところを、あえて図書館を歩いて回るとか、または歩きながら謎解きをする。その謎の中にアートに関する謎とか、スポーツに関する謎とか、あとは答えを高いところにあるポストに投げて入れないと次のステップに進めないルールにするとかという考え方で、3 つとも脇役にして、それらを横断的につなげる何か別のもの、今のでいくと謎解きに当たりますが、そういう別のものでつないでいく連携企画みたいなことをすると、ネガティブな課題になっているようなテーマをたくさん集めて一気に解決できる、そういう 3 分野連携ならではの事業みたいなことができるのではないかな。そういうのをみんなで一緒にやっていくと楽しいのではないかというアイデアが出ました。以上です。（拍手）

■事務局（生涯学習支援課文化・読書・スポーツ連携推進担当）

では、最後に大久保中央図書館長、お願いします。

■事務局（中央図書館長／3 分野連携担当課長）

中央図書館の大久保です。こちらの C グループでは黄色が 3 分野連携、新しい計画に関するご意見が緑、その他のご意見が水色ということで、こんな形で意見のバランスとしては出ました。

多いところからやらせていただきますと、3 分野連携というところで、まず最初に一つキーワードとして出てきたのが、先日あった世界陸上、これはすごく盛り上がったよねというお話があっ

て、ただ、文化とか読書は、どちらかというとならべて地味なイメージがあると。例えば、盛り上げていくのだったら、スポーツのこういう勢いを使って、みんな一緒にイベントをやるというのではないかというご意見が出たのは、私はすごく印象的でした。

では、それを実際に具体的な連携ということと言うと、個別の意見で出たのが、例えばスポーツクラブに文化の要素を入れるですとか、あとは図書館というキーワードをたくさん頂いて、図書館でスポーツをやる。それが親子だったり高齢者だったり。あとは図書館で健康チェックの「ベジチェック」、野菜摂取量のチェックがあるのですけれども、そういうのをやってはいいかかというご意見が出ました。

新計画に関するご意見も様々頂いて、今回評価の報告書を作って、ただ、これは文化・読書・スポーツの共通理念で「楽しさに気づき、深め、広げ」となっているのですけれども、評価報告書からは楽しさが感じられないという厳しいご意見を頂きました。それについては、もう少し楽しさを感じられるようなデザインなのか、いろいろあるとは思っているのですけれども、そういう見せ方の工夫も大切なのかなと感じたところです。

あとは、共通理念を新しくつくったのはいいけれども、事業としては従来型の事業が多くて、従来の事業を評価しているけれども目指すところは新しい理念という、そのところは新計画をつくる時に少し見直さないと発展性がないのではというところで、非常に鋭いご意見を頂いています。それに当たっては、ある程度達成した事業についてはスクラップをして新しいものを入れていくとか、評価委員に1人1スクラップ1ビルドみたいな権限を与えてもらえるといいのではないかという面白いご意見も頂いております。

その他のところでは、こちらアンケートのご意見を頂きまして、先ほどの回答の労力というお話の中では、紙のアンケート用紙に所要時間を入れるですとか、そういった工夫をするというのではないかと、あとは図書館のところで「図書館の職員に相談できる」というのは何の相談ですかということで、やはり文言が分かりづらいというご意見も頂きましたので、そこは改善できるかなと思いました。

私の感想ですけれども、とても20分とは思えない、5分ぐらいの感覚であつという間に終わってしまったので、すごく楽しい意見交換だったなと。これはぜひまたやらせていただきたいなと感じました。以上です。（拍手）

（会長・副会長 元の席へ移動）

■事務局（中央図書館長／3分野連携担当課長）

そうしましたら、残り5分ほどになってしまいましたので、本来でしたら、ここで、皆さんで最後のまとめの意見交換もやりたかったところなのですけれども、お時間の関係もありますので、一旦意見交換はこちらで終了させていただければと思います。

そうしましたら、全体の進行をまた岩永会長にお戻しさせていただければと思います。

■岩永会長

どうもありがとうございました。やはり、グループセッションというのは、いろいろな意見を言ってもらってすごく有効だなということを改めて感じました。やはり全体として「何かご意見はありませんか」と言うのと、なかなか手も挙がらないし、こういうことを今言っているのかなというのが。特にこういういろいろな要素があって、いろいろなことを考えなければいけないというテーマに関しては、非常に有効だなと感じました。ありがとうございました。

そろそろ時間となりまして、既に先ほど大久保さんからまとめをされてしまいましたので、第3

回足立区文化・読書・スポーツ推進委員会はこのあたりで終了ということにさせていただきたいと思います。

本日は各分野の施策評価シートの確認・共有、そしてアンケート調査票案の確認、また、これまでとは違うグループ形式での意見交換、特に違った分野の方たちとミックスになった意見交換というのは非常に有効で、議論も非常に盛り上がったと感じました。委員の皆様のおかげで非常に濃く深い議論になったものと思います。本日は誠にありがとうございました。

それでは、最後に事務局から今後のことについて等の事務連絡をお願いします。

事務連絡

■事務局（中央図書館長／3分野連携担当課長）

皆様、長時間にわたりまして本日はありがとうございました。事務局から3点ご連絡させていただきます。

1点目ですが、次回開催でございます。こちらは秋にアンケートを実施しまして、その結果をもって、令和8年1月～2月頃にこちらの全体会議を実施させていただきたいと思います。これから日程の調整をさせていただきますので、ご協力をよろしくお願いいたします。

2点目になります。本日の会議録につきましては、事務局にて案を作成しまして皆様にお送りさせていただきます。グループワークでの議事録も作成させていただきますので、ほかのグループでの意見交換につきましては、そちらをご参照いただければと思います。委員の皆様の確認が終わり次第、区のホームページに掲載させていただく予定となります。

最後に3点目となります。本日お車でお越しの方につきましては駐車券をご用意いたしますので、係の者にお申しつけいただけますと幸いです。

最後になりますけれども、本日、評価報告書ですとかアンケートですとか、頂いたご意見につきましては、事務局で反映させていただきまして、先ほど申し上げましたように各部長、それから全体の岩永会長にもご確認いただきまして、アンケートですとか報告書の案を固めてまいりますので、よろしくお願いいたします。

事務局からの事務連絡は以上となります。

閉 会

■事務局（中央図書館長／3分野連携担当課長）

本日は皆様、誠にありがとうございました。